平成２９年度指定文化財

土崎神明社棟札

１　指定文化財の概要

２　土崎神明社について
（１）創建について
（２）信仰について
（３）祭礼について
別表１　土崎神明社祭の曳山行事関連文献資料
（４）古絵図から見た土崎神明社について

３　土崎神明社の棟札資料について
（１）棟札資料の概要について
（２）棟札の形状および材質について
（３）棟札の記載内容について
（４）棟札の釈文について
別表２　土崎神明社棟札年代・種別一覧
別表３　土崎神明社棟札記載内容・形状一覧
別表４　土崎神明社棟札記載人物職名一覧
別表５　土崎神明社棟札国・町（当所）等記載一覧
別表６　土崎神明社棟札梵字一覧

４　棟札関連資料について
（１）土崎の火災記録について
別表７　土崎大火記録
（２）秋田市内の棟札について
別表８　秋田市で調査・報告された棟札一覧

1　指定文化財の概要

（１）名　称　　土崎神明社棟札
（２）員　数　　31点
（３）種　別　　有形文化財（歴史資料）
（４）所在地　　秋田市土崎港中央三丁目９番３７号
（５）所有者　　宗教法人　神明社
　　代表役員　伊藤茂樹
（６）年　代　　慶安３年（1650）から昭和62年（1987）
（７）概　要

本物件は、土崎神明社本殿に収められた棟札で、慶安３年（1650）から昭和62年（1987）までの31点が現存している。

土崎神明社は、慶長年間に佐竹氏に従い入部した常陸国の住人川口惣治郎が、氏神を元和６年（1620）に湊城跡に湊の総鎮守として勧請したのがはじまりとされる。以来、長きにわたり地域の崇拝を集め、その祭礼は土崎神明社祭の曳山行事として知られる。

棟札は、本殿建替えと遷宮、鳥居の建立や再建、社殿の修理や寄進などに伴うもので、記載内容から社殿や境内地の変遷と配置、建替えに関係した町人や土崎湊の様子を知ることができる。

長期にわたり神社の改築や地域との密接な関係性を記録する一括性の高い棟札群であり、藩政期から近現代にわたる秋田の湊町の状況を知る上で貴重である。

２　土崎神明社について

（１）創建について

土崎神明社は、元和６年(1620)、土崎湊町の肝煎であった川口氏の氏神の神明社を秋田（安東）氏の居城であった湊城の跡地に移し、土崎湊町の総鎮守としたことを起源としている。

この創建の経緯については、川口家に伝来している古文書「神明宮由緒」(1941 秋田市土崎出張所 『土崎港町史』 p.85）では、次のように記述されている。

一、この町の神明宮のその根本といふのは、慶長年中の御國替によって、御先代義宣公様がおいでになつてからのち、御家臣が追々御供として湊へ下ったとき、川口惣次郎と申す者、水戸表に住居いたして居りましたときから、氏神として居りました神明の御畫像を守って、當地に下ってまゐりましたが、惣次郎ことは、御上において、御わけ柄があって、湊町、『御高方肝煎役』を仰せ蒙り、當所を支配いたすことゝなりました。神明様は自分の屋敷のうちへ、『禿倉』を建てゝ安置して居りましたけれども、なにしろ町屋敷のことであるから、手ぜまであつて、とかく粗末がちのためであつたか、不幸ばかりつゞきますので、神慮のほど恐れ入り、どうにかしてほかの地へ安置いたしたい所存で居りましたところ、川口惣次郎ことは、當所支配もいたして居ることなので、折をもつてそのことを湊總町に相談に及び、近來當湊もいたつて繁昌に向つて來て諸國の人も船もたくさん入り込んでくるのに、當所に鎮守がないのでは、旅人の聞えもなげかわしく思ひますが、しはひ拙者の『氏神堂』を別の地に安置いたしたいと考へて居りますので、右神明様を當所の鎮守にするといふことは、どういふものであろうかと、相談したのであります。

一、（前略）川口惣次郎ことは、次郎の二字がなにかお障りあるとか云ふので、彌左衛門と改名いたしたとのことであります。

一、今度是非、拙者の氏　神當所の鎮守にいたしたいと云うことを、兼て總町の人々へも、掛合ひをいたしてあります。當地は秋田城之介様の御城跡であつて、空地にしたまゝ、いまに至つてゐるが、これを御畑地にすることも恐れ入ることであるから、いまのことを御願ひ申上げて、この地へ安置することを、すでに町の人々一統申合せお頼み申上げたところ、願ひのとおりお許しが出たので、元和六年庚申年四月一日に當社地へ安置いたしました。

この由緒書からは、

ア　慶長年中（※７年　1602年）に佐竹義宣が秋田への国替えに伴い当初、現在の土崎の湊城に入ったことから、多くの常陸出身の家臣が、佐竹氏の後を追い、土崎湊に移り住んだ。

イ　そのなかの一人、川口惣次郎が、常陸水戸時代の川口家の氏神としていた神明の書像とともに土崎に移ってきた。

ウ　川口惣次郎は、「御高方肝煎役」（年貢地の肝煎）をつとめた。

※庄屋・町役人もつとめ、川口家は高方肝煎と庄屋を明治まで世襲している。

エ 常陸から移した神明の書像は、自身の屋敷のなかに禿倉（ほこら）を建てて安置していたが、手狭であったために、粗末になりがちであり不幸が続いたことから、他の場所に移すことを望んだ。

オ 川口惣次郎は、「土崎湊町は近年繁昌し、諸国の船もたくさん入ってきているのに土崎湊町に鎮守がないというのは旅人にも評判が悪いことから、自宅の氏神堂を別の場所に安置し、神明様を町の鎮守にするのはどうだろうか」と相談した。

カ 川口惣次郎は、弥左衛門と改名した。

キ 川口家の氏神を土崎湊町の鎮守にすることを相談してきたが、（移す場所として）秋田城之介様の御城跡（秋田氏の居城湊城跡）を空き地にしたままであり、畑地にするのも恐れ多いことであるので、城跡に氏神堂を移すことを町の人々に相談し了解を得た。

ク そのため、元和６年(1620)４月１日に、城跡に氏神堂を移した。（神明宮とした）という骨子が読み取れる。

狭い場所に祀っていた自宅の氏神である神明様を広い場所で祀りたい、港町として発展しているのに町の鎮守となる神社がないことは他国への評判も悪い、佐竹氏の国替え、久保田築城により廃城となった秋田氏の城跡を放置するのは恐れ多い、といった川口惣次郎と町の思いが、土崎神明社の創建につながった経緯がうかがわれる。

なお、土崎神明社は、大正２年(1913) ８月、鎮座三百年祭を執行している。逆算すれば、土崎神明社の創建は慶長18年(1613)となるが、由緒書から、川口氏の氏神として勧請され、最終的に湊城の跡地に遷座されるという段階的な創建の流れが考えられる。『秋田市史』によれば、川口惣次郎（彌左衛門）の土崎湊町への移住は、佐竹氏秋田入部後の慶長９年（1604)と伝えられ、氏神としての勧請は慶長９年または９年からそれほど年月を経ずして行われたと考えられることから、湊城の跡地に遷座する前に川口氏の氏神から町の鎮守とされるなどの段階があった可能性がある。

このように考えれば、川口氏の氏神としての勧請が慶長９年、町の鎮守としての神明社のそもそもの創建が慶長18年、湊城跡地の現在地に移されたのが元和６年とも考えられる。

（２）信仰について

①住民の信仰

土崎神明社は、天照皇大神を祭神とし、町の総鎮守として篤く崇拝されていた。

川口家文書（1999 秋田市 『秋田市史』 第十巻 近世史料編下 p.10）に御前踊りに関する記述がある。

> 一明和二乙酉八月、御前踊同十三日御上覧之事ニ被仰付候所、雨天ニて、同十六日天気能　御上覧首尾能相勤罷帰申候、八月廿三日於神明社地笠納仕候、尤善導寺より行烈ニて下酒田町より神明社内へ通り申候、拍子方行烈之義式不見もの数多有之候故、如此致申候

御前踊りは、藩主が参勤交代制により江戸から無事、帰国したことの祝いとして行われるものであるが、大町、茶町という外町の有力町とともに土崎湊町から参加することは、町としての格を高め、誇りとなっていたと考えられる。

川口家文書では、明和２年(1765)、御前踊りの御上覧の後、神明社地において笠納を行い、善導寺より行列で下酒田町から神明社内に拍子方の行列で多くの見物人がいたことが記述されている。

笠納は、祭礼が終わった後の報告会、慰労会として行われる。御前踊という町の誇りをかけた重要行事の笠納を土崎神明社で開催していることや土崎神明社までの道筋をにぎやかな行列で進んでいることなどから土崎湊町の住民にとって土崎神明社が篤い信仰の対象であるとともに地域連帯の象徴的な存在であることがうかがわれる。

地域連帯の象徴的な存在であることは、土崎湊町で騒動が行った際の住民の動きからもうかがわれる。

天保４年(1833)、長雨による米の不作から飢饉（巳年のけかち）となり米不足から、米価が高騰し、土崎湊町の住民にも深刻な影響を与えた。

川口家由緒書（1941 秋田市土崎出張所 『土崎港町史』 p.225）では、「天保四年長雨にて青田となり、大飢饉に相成り在々より乞食に出るもの餓死いたすものその数を知らず」という飢饉のなかで「手間取、七八百人大勢相催し、湊惣町大騒動に相成り」という騒乱状況となった。

その際、秋田藩士で土崎出入役所などに関わった橋本五郎左衛門秀実は、「八丁夜話」（1972 井上隆明 相沢清治 『第二期新秋田叢書』（二））において騒動の具体的な状況が記述されている。

> 内石田文五郎宅へ百人斗罷越米無心申懸、文五郎米無之由挨拶致候処蔵ヲ見申度トテ、文五郎先立いたし米数帳面にいたし居候趣申来り、其内山王丸右衛門・小野屋義兵衛・真鍋喜兵衛其他搗屋へ参り米の員数帳面に致居候趣追々申来候。右騒立に相成候砌、御休詰差引役須田喜一郎罷越、如此騒立如何可致やト伺致故、只今庄屋御同心差遣候取次役御用有之、新町御蔵へ参候故追々差遣可申、貴様早

々被相越何レ願筋存慮の義は手元にて引受候て願呉可申、如此大勢騒立候ては不軽不調法に相成候故、人数早々引取可申厳重に可被申渡、夫にても承知無之候はゝ急度御示方有之候故、能ゝ被申含可申ト申付差遣候処、暫有之喜一郎罷帰被仰含候処、一先神明社中に皆々引取候。

米を求め、集団となり商家に押しかけた住民に対し、藩の役人が説得し、ひとまずその場がおさまった後、住民は土崎神明社に移動している。住民にとって土崎神明社が心のよりどころになっていることがうかがわれる。

大正２年(1913) ８月の鎮座三百年祭では、祭式の後、町の功労者、善行者の表彰や養老式を行っており、住民を顕彰する場として土崎神明社が活用されている。

②藩・公権力との関わり

町の総鎮守として崇拝されていた土崎神明社は、藩・公権力との関わりも強かった。

藩からの財政支援として、神社の維持のため、寛政８年(1796)、米100石を「湊町鎮守神明社倉為一郷備」とし、沖出役銀を無役にしている（2003 秋田市 『秋田市史』 第三巻 近世通史編 p.685）

覺　米百石　湊町　但シ輕升　右ハ湊町鎮守　神明社倉爲一郷備　今辰年ヨリ役銀差免候間右米年々　同所沖口調べ無役ニ　相通ベク候　以上
寛政八年　辰四月三日　小膳印　川方支配中

秋田藩９代藩主佐竹義和公は御直筆の神明の縣額を、源義和の名をもって奉納している。(1941 秋田市土崎出張所 『土崎港町史』 p.90)

前述の「八丁夜話」では、土崎湊町における博打の取り締まりを土崎神明社の別当に任せている（天保３年）ことや作者で秋田藩士の橋本五郎左衛門秀実が土崎湊町に赴任した際に参拝している（天保４年）という記述があり、藩との関わりの強さがうかがえる。

湊博打吟味の次第支配違のもの多く入交り候へとも、三光院（神明別当）取扱に任せ過料を以内済せしよしを伊紀へ達しまいらせぬ

四月朔日。今日より湊役屋へ在番に参れり。・・・(中略)・・・湊入口へ庄屋勘定役御用聞町代問屋とも何れも出迎詰合御同心小頭も出る。披露にて挨拶通る。役屋門前へ駅場本〆役小野屋儀兵衛出る。玄関へ駕籠乗込、詰合取次役代物書勘右衛門出る。当日の賄は湊町より出る。翌朝より手熨しなり。詰中無為なり。感恩講に準出金の族へ餅子為取、神明社参。

明治13年(1880) ７月、氏子総代連名のもとに、社格の昇進を出願し、翌14年３月

10日、縣社に列せられ、以後は祭典当日には県から、幣帛供進使を派遣されている。（1941 秋田市土崎出張所 『土崎港町史』 p.89）

③伊勢信仰

土崎神明社は、土崎湊町の総鎮守に加え、秋田における伊勢信仰の中核として信仰を集めていた。

川口家文書（1999 秋田市 『秋田市史』 第十巻 近世史料編下 p.35）では、享保19年(1734)、湊町の小路の幅についての記述の中で御伊勢小路、御伊勢下小路の小路名がみられ、土崎神明社が伊勢神宮につながる神社として信仰されたことがうかがわれる。

18世紀末から19世紀初頭の荻津勝孝作とされる「秋田風俗絵巻」では、旧暦６月の土崎神明社の例祭において、伊勢ののぼりが建てられている様子が描かれている。

菅江真澄の「雪の道奥雪の出羽路」(1967 内田武志 宮本常一 『菅江真澄遊覧記』４ p.26)では、享和元年(1801)、「土崎の港にはいると、萱村町と萩町とのあいだに内外の宮をうつし奉った社があり、たいへん年をへているということであった。～中略～十五日　朝早く神明社に詣でた。このあたりはむかし、湊の館といった城跡である」とある。

『羽陰温故誌』には、奇譚として土崎神明社に朝夕拝み伊勢参宮を念願していた人が、魂となって伊勢神宮に参拝した話が紹介されている。

年代はあきらかではないが、下酒田町に、越前屋多右衛文といふ人が居つた。神佛を深く信じてゐたが、わけても若い時から、一度伊勢参宮をなしとげて太大神楽を奏してもらひたいと、朝夕わすれず、土崎の神明社を拝みながら念願としてゐた。けれども、家事のいそがしさに、生涯の願ひを果たさないうち年老ひていつか病床のひとゝなつてしまつた。そして明け暮、遺憾に思ふのは、若年からのたゞ一つの念願を遂げぬことであつた。さうして病床によこたはつてゐた或る日のこと、突然、床に起きて、家族を呼んで言ふには、自分はこれから、伊勢参宮をするのであるからと、沐浴潔齋、裃を着して、その姿のまゝふかい眠りにおちて一晝夜たつてから眼を覺ました。そして家族に言ふには、非常なよろこびをあらはし、安心の表情で、これでわが希望をはたすことができた。御伊勢詣りをなしとげたと言ふと、間もなく眼を閉じ、そのまゝ黄泉の客となつてしまつた。其の翌年、不思議にも、伊勢神宮から御使ひがあり、とにかく、太々神楽の謝状と萬度の祓等を送ってきた。これには家族を驚愕させ、奇異の思ひをさせたが、其の御祓は、事實、此の家に保管されてあるとのこと。此の話はあまねく人々に知られてゐることである

（３）祭礼について

土崎神明社の祭礼は、「土崎神明社祭の曳山行事」として平成９年（1997）に国の重要無形民俗文化財に指定され、平成28年（2016）には、「山・鉾・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録された。祭礼として曳山行事が行われるようになった時期は定かではないが、18世紀の初頭に旅人（土崎湊へ入港した船乗りたち）によって神輿が寄進され、神輿渡御が行われていたことはわかっている。文献資料により土崎湊町をにぎわす風流系の祭礼としての状況が確認できるのは、18世紀末以降であり、曳山の他、かつぎ山、鉾、屋台、練り物などが出されていた。（別表１　土崎神明社祭曳山行事関連文献資料）

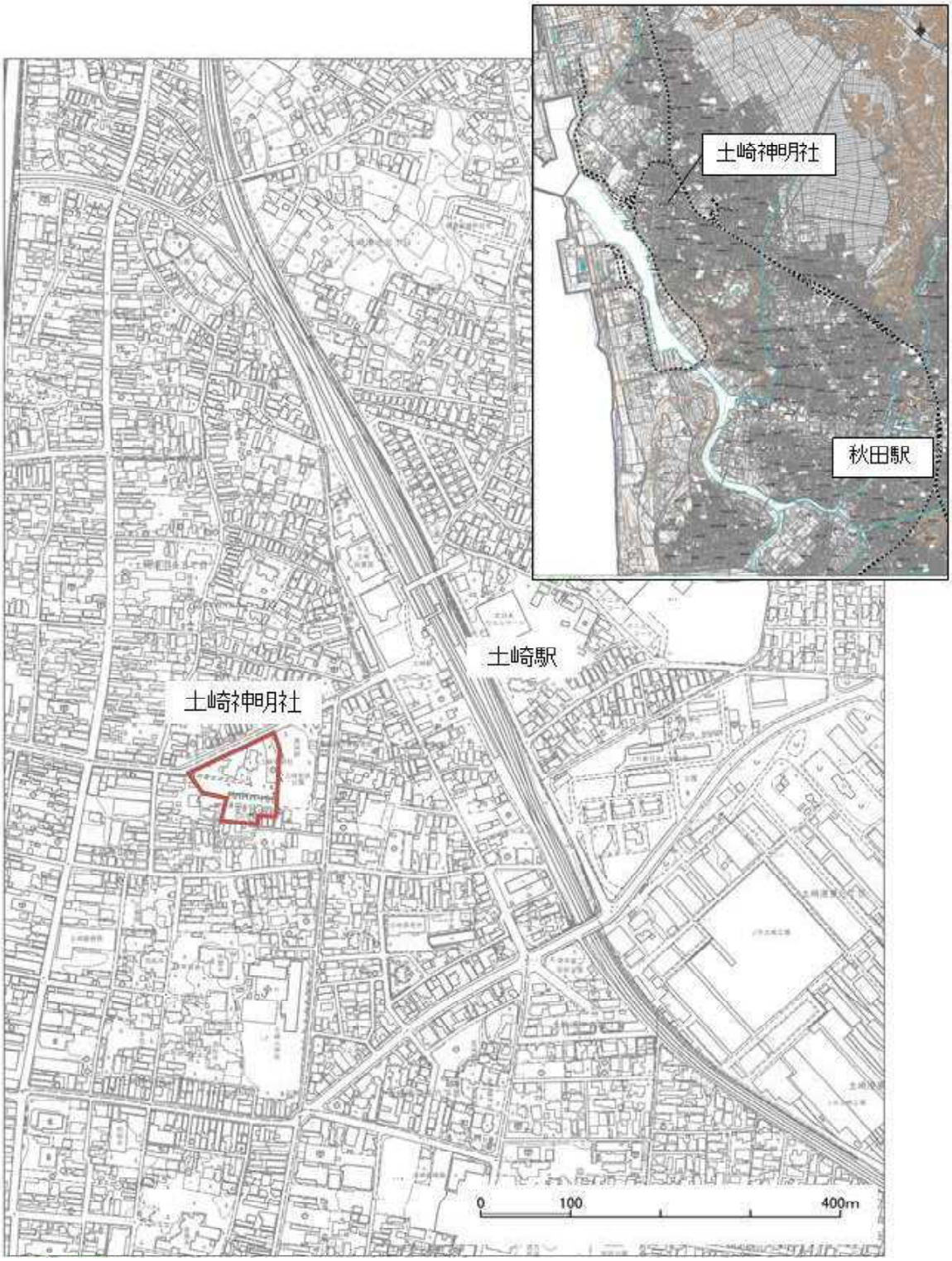


図１　土崎神明社位置図

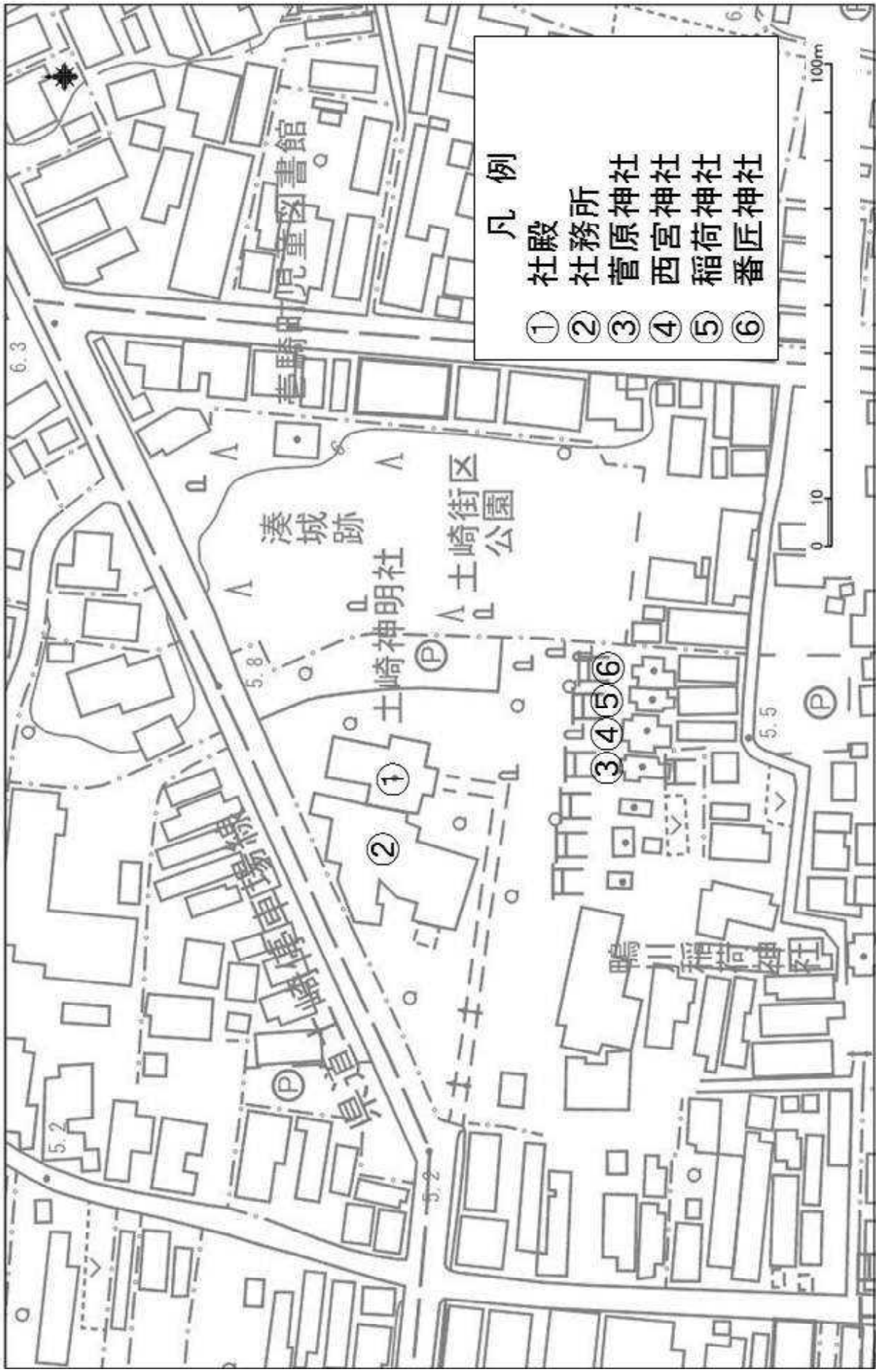

凡 例
① 社殿
② 社務所
③ 菅原神社
④ 西宮神社
⑤ 稲荷神社
⑥ 番匠神社
0
10
100m
吉勝町児童図書館
湊城跡
土崎神明社
土崎街区公園
土崎神明社
土崎駅
国道7号
6.3
5.8
5.2
5.5

図２　土崎神明社境内図

（４）古絵図から見た土崎神明社について

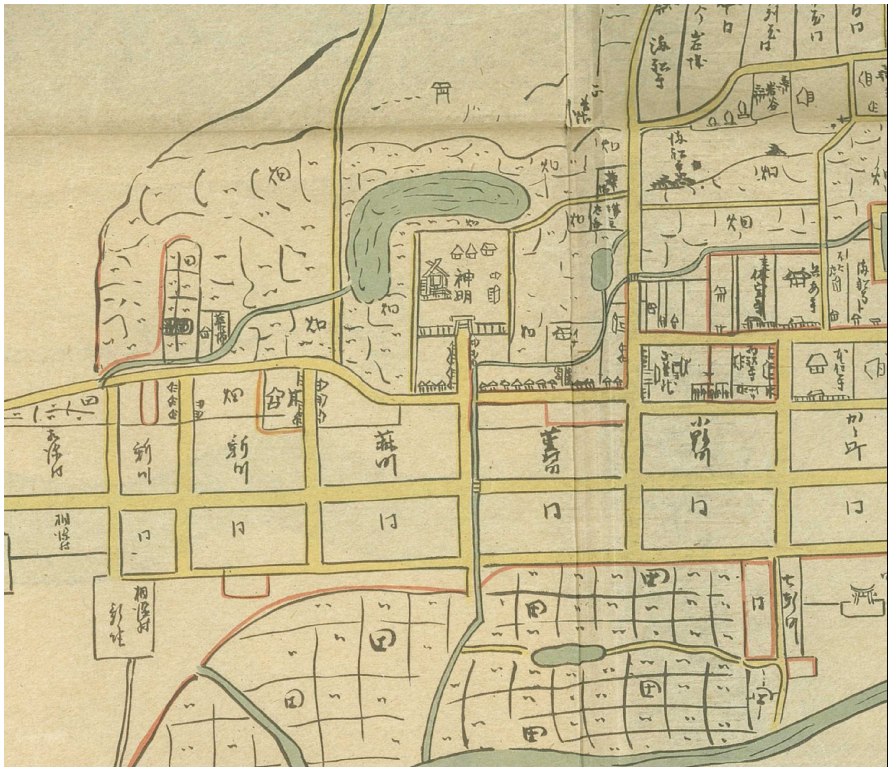
①元文年中湊古絵図

表書に「此絵図湊町東ノ方山屋敷之辺元文年中之頃相認候事ニ可有御座古絵図壱枚湊町高方所持仕罷有写」とあり、元文年中（1736－1740）に山屋敷（土崎の廻船問屋の下屋敷）、後の元（本）山町周辺におきる地境論争のために製作された絵図であると考えられる。

土崎神明社は、北側、東側に旧城の堀があり、堀の内側の方形に区画され記載されている。鳥居は西面し、両脇には板塀のように図化されている。本殿は、境内の北側に位置し、境内社と思われる小さな社が南側に描かれている。なお、1941年の土崎港町史では、境内社は、西宮神社、稲荷神社、秋葉神社、住吉神社、大國主神社、大國主夷子神社、菅原神社本殿の７社である。

鳥居と南北の塀の方向は、羽州街道（現本町通）に沿った萱村町、萩町の方向と平行している。境内の南北境内地の北、東、南側は畑地になっているが、

秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴い、平成19年（2008）、20年(2009）に実施された土崎神明社・堀の東側の発掘調査では、18世紀から19世紀にかけて畑として使用されたことが確認されている。



※引用参考文献
『土崎港町史』、秋田市役所土崎出張所、1941年
渡部景一、『秋田市歴史地図』、無明舎出版、1984年
『秋田市湊城跡－秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成19年度調査区)』、秋田市教育委員会、2009年
『秋田市湊城跡－秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成20年度調査区)』、秋田市教育委員会、2009年

②秋田街道絵巻

３巻からなり、八橋一里塚から津軽藩岩館村（八峰町）までの羽州街道と大間越への道筋を描いている。江戸後期、荻津勝孝作とされ、土崎地区は、西側の日本海側から俯瞰した形で描かれている。

西面した鳥居があり、鳥居の南側には東西に直線的な木柵があり、鳥居の両端には大木があり、境内内は鬱蒼とした木々が描かれている。鳥居の内側に参道のような枡目が描かれているが、角度上のバランスから参道の石畳としては不自然な形になっている。鳥居から奥の本殿、拝殿などは見えない。

南側に正善院、西船寺、休寶寺が現在とほぼ等しい位置関係に描かれている。

※引用参考文献

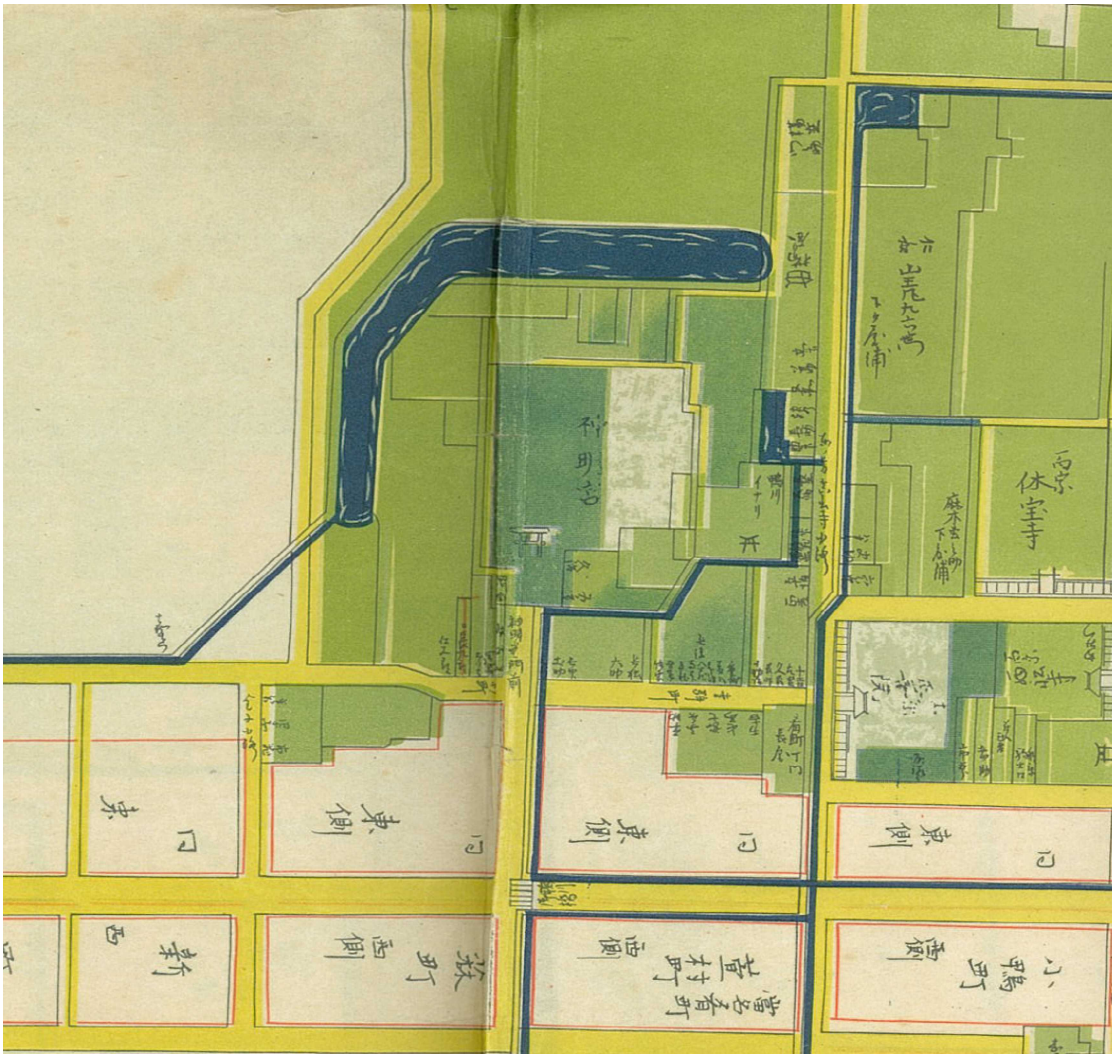
『秋田市史』第十五巻　美術・工芸編、秋田市、2000年

③湊町古絵図

弘化３年(1846)に土崎湊町高方肝煎であった川口弥左衛門（川口氏13代目）が、湊町の町割の概略と、寺社方除地、御郡方湊町御年貢地、御勘定方地、御町方地などの区分を示すために作成された。

土崎神明社は、絵図の北端に記載されている。鳥居は現状と同じく西面し、羽州街道と平行している。北側、東側には旧城と伝えられる堀が残り、南および西側の一部には直線的な水路が走っており、堀と水路に囲まれたエリアは、道によりほぼ正方形に区画されている。絵図の色分けによると、境内地南側の水色の範囲が寺社方除地、北側の緑色の範囲が御郡方湊町御年貢地とされている。西に隣接する萱村町（肴町）と萩町の間の東西の道は「神明堂門前」と記載されている。

寺社方御除地は、神社や寺院のある土地として年貢を免除されていた土地であり、同絵図では、土崎神明社の他に虚空蔵神社、愛宕神社、龍神社、金刀比羅神社の５神社、金光寺等15の寺院が寺社方御除地となっている。

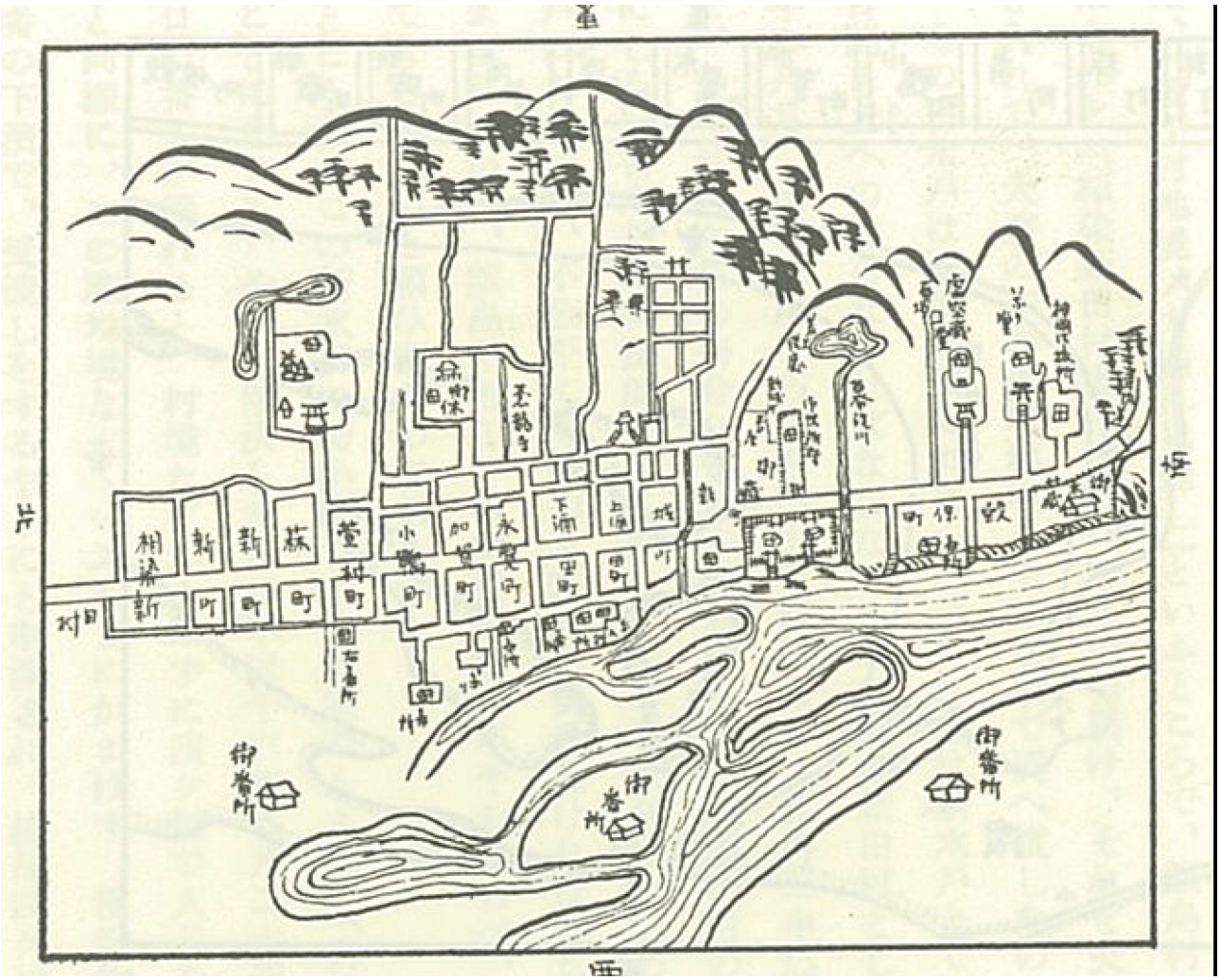


※引用参考文献
『土崎港町史』、秋田市役所土崎出張所、1941年
『秋田市の文化財』、秋田市教育委員会、2001年

④土崎湊嘉永記年圖

嘉永年間（1848－1854）の絵図と『土崎港町史』で紹介されている。

萱村町から萩町の間の道の西に鳥居があり、境内地の北側に社殿が描かれている。鳥居からの道は境内地の西、北を区画するように東に延び、旧城の堀跡につながるように描かれている。



※引用参考文献

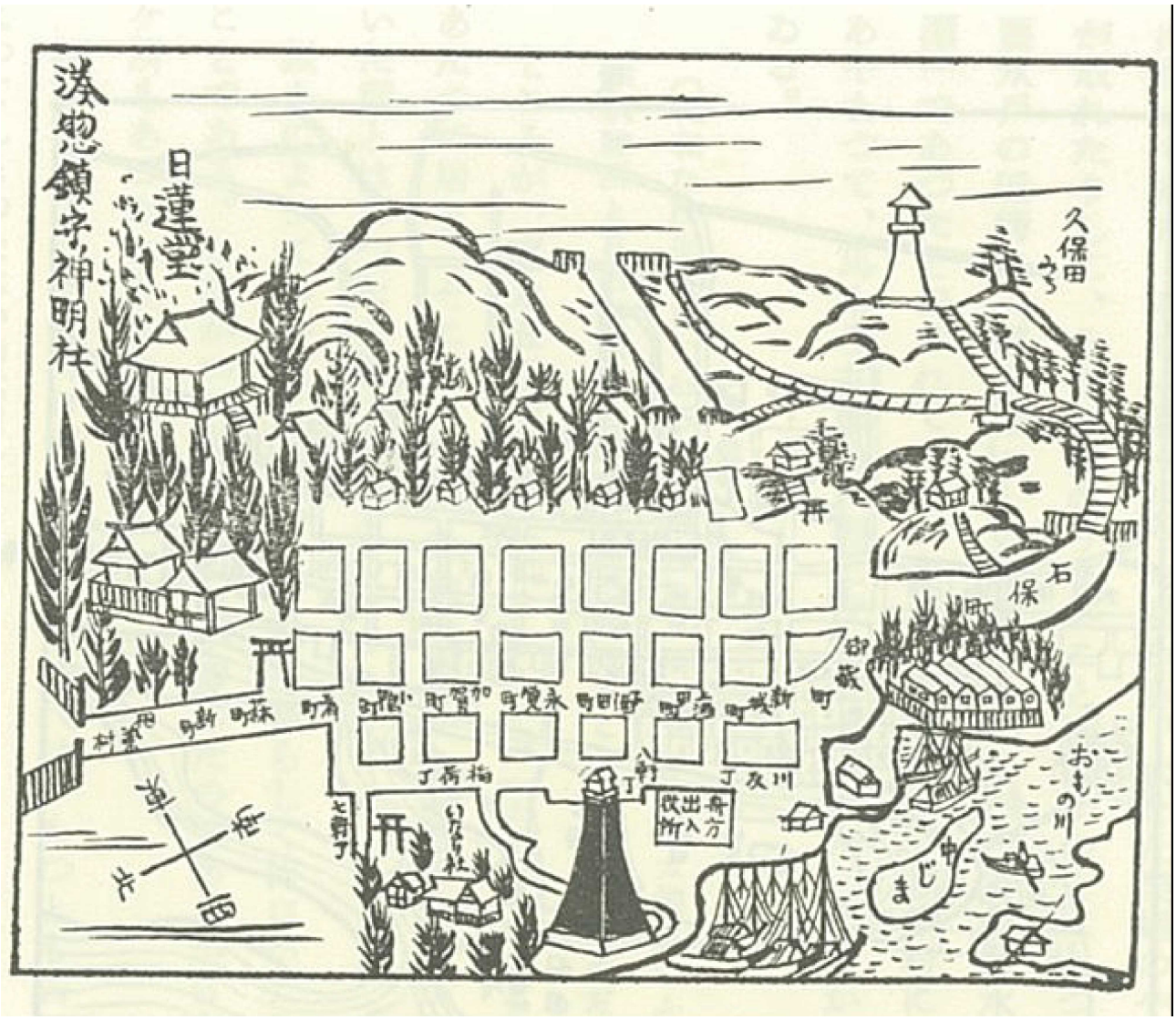
『土崎港町史』、秋田市役所土崎出張所、1941年

⑤東講商人鑑

『東講商人鑑』は、江戸の大城屋良助が発起人となり設立された東日本を中心として結成された東講が安政２年（1855)に刊行した。東講に加盟している定宿や問屋・商店などが記載され、町並や目印を立体的に描いた図が挿入されている。

御蔵町から肴町までは、各町は街道に沿って、□で表現されているが、萩町から北の町は街道上に町名を記載するのみである。肴町と萩町の間に鳥居と社殿が描かれ、湊惣鎮守神明社と記されている。社殿は、拝殿と本殿で玉垣で結ばれ、南北の街道に対して斜めに描かれている。

全体的にデフォルメされており、写実性には疑問がある。

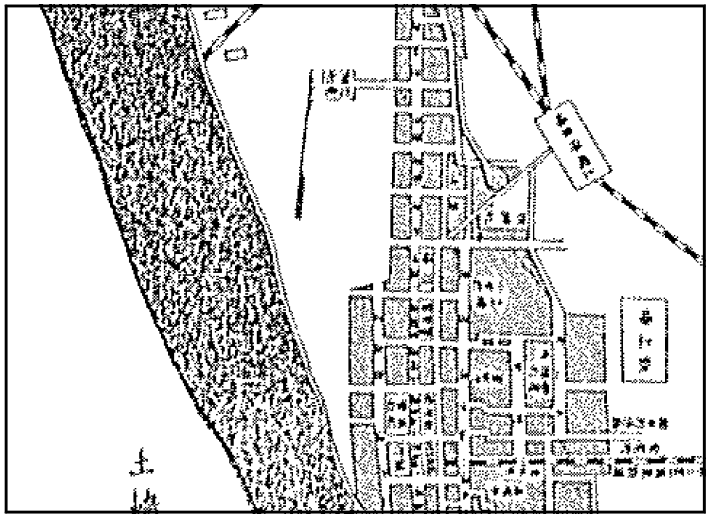


※引用参考文献
『土崎港町史』、秋田市役所土崎出張所、1941年
『秋田市史』第三巻　近世通史編、秋田市、2003年

⑥新撰秋田市全図

秋田市茶町菊之丁の成見書店が、明治43年（1910）に発行したものを明治45年(1912)に訂正した地図である。

明治35年(1902)に土崎駅が開設され、神明社の境内地を斜めに切断する形で駅へのアクセス道路が整備されたことがわかる。



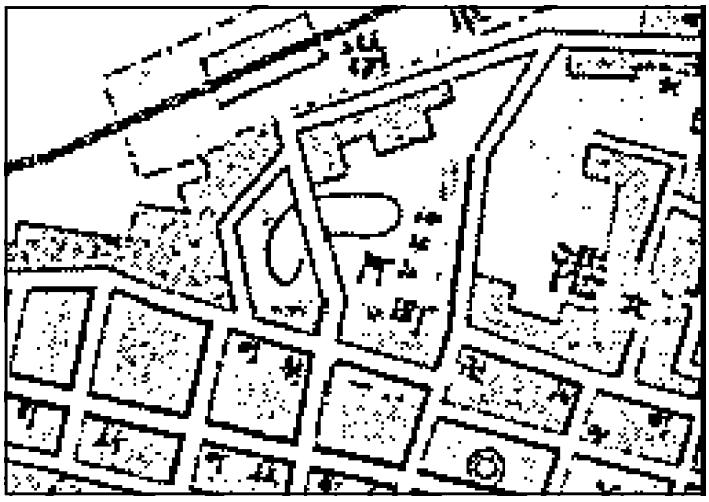
※引用参考文献

渡部景一、『秋田市歴史地図』、無明舎出版、1984年

⑦秋田市近郊地図

秋田市上通町の秋田出版協会が、大正５年(1906)の６月に調査し、８月に発行した地図で、秋田市を中心に、当時の南秋田郡土崎港町、外旭川村、旭川村、広山田村、河辺郡新屋町、牛島町を示している。

大正５年段階で、旧湊城跡の堀が土崎神明社の北・東側に大きく遺っていたことと、土崎駅に向かう道路が、土崎神明社の境内地に加え堀を斜めに横断していることがわかる。



※引用参考文献

渡部景一、『秋田市歴史地図』、無明舎出版、1984年

３　土崎神明社の棟札資料について

（１）棟札資料の概要について

調査した棟札31点のうち、もっとも古いものは慶安３年(1650)、もっとも新しいものは昭和62年(1987)のものである（別表２　土崎神明社棟札年代・種別一覧表参照)。

銘文の内容に基づいて分類すると、本殿を建て替えて神体を遷す遷宮に係るものが15点、幕・鏡などの神社への寄進に係るものが４点、鳥居の建立や再建に係るものが６点、社殿の修理に係るものが６点である。

主体となる本殿建て替えの棟札は、神明社で約20年毎に行われていた遷宮に伴うものと考えられる。(註１)

（２）棟札の形状および材質について

棟札の基本形態は頭部が尖頭形のものがほとんどを占め､頭部が平頭形のものは、明治30年（1897）の本殿建替えに伴ってつくられた１点のみである（別表３　土崎神明社棟札記載内容・形状一覧参照)。尖頭形の頭部は、左右対称に切断されているものと板に対して垂直ではなく、左右で向きを変えて斜めに切断されているものがある。後者は「入」の字を模して切断されたと考えられ、来訪者の増加を祈願したものとされる。これは秋田県内の棟札に特徴的な形態である。

寸法としては、全長70.9㎝～154.6㎝、幅16.7㎝～幅36.3㎝、厚さ1.0㎝～4.2㎝のものがある。幅20㎝台後半より大きく、全長が90㎝台後半より大きい大型のものは、明和６年（1769）の江戸時代中期後半以降に認められ、時代が下るにしたがい大型化する傾向が認められる。

材質の内訳は、31点のうちスギを使用したものが24点、マツが４点、ヒバ２点、カツラ１点であった。表面には木表、木裏どちらも利用されている。設置のための釘穴が確認できたものは４点のみである。

（３）棟札の記載内容について

棟札には社殿の建立や修理、寄進の行為とその願文、紀年銘に加え、願主や寄進者、普請関係者、大工や職人などの人名が記載されている。(別紙１　土崎神明社棟札釈文参照)

①棟札の記載形態（別表３　土崎神明社棟札記載内容・形状一覧参照）

棟札の基本的な記載形態としては、近世の棟札については、表面の中央に願文および建築寄進内容を大書し、左右の上部に年号や諸仏諸神、左右の下部に導師、別当や願主、寄進者名を記しており、裏面には大工や職人名を記している。大工を表面に、また、寄進者名を裏面に記す場合もある。一方、近代以降の棟札については、

裏面に年号や寄進者名を記している。

近世の棟札には上部に梵字が記されているものもある（別表６　土崎神明社棟札記載梵字一覧参照）。その他、呪符とみられる記号が棟札の上部にみられるものもある。こうした梵字や呪符は棟札に記された願文の効果を高めるために記されたと思われる。例えば、棟札20裏面、23表面の四隅にみられる「　」の符号の意味については、地蔵菩薩の種字の略字、水という漢字の縦棒を略したもの、四天王を表したもの、「封」を意味する「〆」を二分したものといった説がある（山梨県教育委員会、1995）。棟札５、７、８では、「封」という文字を符号的に使用している。棟札の上部や下部の両端に記したものと「封」という字を「圭」と「寸」に分解して両端に記したものがみられる。これも、願文の効果を棟札に留める意味があると考えられる（佐藤、1995）。棟札１～３の上部には複数の符号を合成したものがみられる。この符号の下には、法華経の偈句「聖主天中天　迦陵頻伽聲　哀愍衆生者　我等今敬礼」が記されており、「中」の文字を「天」四字で囲んだ記号は、偈句の「聖主天中天」を合成したものであると思われる（横浜市歴史博物館、2002）。その他の記号も法華経との関わりが想定される。

なお、一部棟札の裏面上部には、棟札とは別の筆、書体で番号付けがされており、以前に何らかの調査および整理がなされた段階のものと判断される。

②棟札記載の人名および役職やその構成について（別表４　土崎神明社棟札記載人物職名一覧参照）。

時代が下るにつれて、丁代や職人など寄進および普請関係者の記載が増えることから、遷宮が徐々に大規模になり、地域の組織が複雑化していったことがわかる。特に江戸時代後期、文政年間以降の棟札において、その傾向が顕著となる。文献資料によれば、この時期は土崎神明社の祭礼が盛んになった時期でもあり、地域における神明社の役割が大きくなっていったこともうかがえる。

また、銘文には、「庄屋」もしくは「当津庄屋」という役職名の記載がある。「庄屋」は村の長のことで、主に関西地方で使われていた。東北・北陸地方では「庄屋」ではなく、「肝煎」を使用することが一般的だったため、北前船[註2]などの海運で上方とつながりを持つ土崎湊の町組織が、その影響を受けて使用した可能性がある。

また、庄屋などの役職に「見習制度」があったことも分かる。「庄屋加談」や「庄屋見習」などの補佐職や見習い職などが確認され、組織が整備されている時期は、文政年間以降の江戸時代後期となっている。

③棟札願文の記載内容について（別表５　土崎神明社棟国・町（当所）等記載一覧参照）

棟札願文中には「入船増長」、「堅固入船」、「賈舶輻湊」といった文言がみられる。これは湊の繁栄を祈願して記されたものであり、土崎湊が北前船の寄港地であったことと深く関わる。さらに、「五大龍王」、「八大龍王」の神名が記された棟札

もみられる。龍王は水の神であり、火伏せの意味を込めて記されたと考えられるが、漁民の信仰対象でもあった。これらの記載は、港町の総鎮守としての土崎神明社の性格を反映したものとして特筆すべき点である。

また、願文の中には「国家」という記載があり、近世において、民衆に「国家」意識があったことがわかる。対して、明治以降になると「国家」に関する記載はなくなり、意識の変化がうかがえる。棟札中の「国家」の記載については、「国」を佐竹氏領の秋田藩としてとらえ、領内の安泰を願うという意味を持つとも考えられる。

その一方で、棟札願文の中に土崎の「町」に関する記載も認められる。31点のうち、10点に関連の記載がある。宝暦10年（1760）から安政４年（1857）までの８点には「当所（処）繁昌（晶）／繁栄」という記載がある。天明３年（1783）の２点には「町内」の記載がある。「町内」、「当所」の繁昌・繁栄を願う記載は、江戸時代中期後半から現れ、江戸時代後期まで認められる。当該期における「町」への意識、町の自治意識の高まりを示すものとも考えられる。

（４）棟札の釈文について

棟札記載の文字については、半田和彦秋田市文化財保護審議委員会副委員長の判読と確認により、釈文を作成した。釈文については、別紙１「土崎神明社棟札釈文」のとおり。

（註１）土崎神明社によれば、遷宮は21年ごとに行われており、これは伊勢神宮の遷宮の周期に１年を加えて実施していたためと伝えられている。

（註２）江戸時代、北海道・東北・北陸と西日本を結んだ西廻り航路は経済の大動脈であり、この航路を利用した商船は北前船と呼ばれた。北前船は、米をはじめとした物資の輸送から発展し、船主自身が寄港地で仕入れた多種多様な商品を別の寄港地で販売する買い積み方式により利益をあげていた。土崎湊はそうした北前船の寄港地のひとつとして栄えた。

４　棟札関連資料について

（１）土崎の火災記録について　（別表７　土崎大火記録参照）

土崎神明社棟札の社殿や鳥居の建替えに関係する可能性がある火災記録については、「土崎港町史」によると、元禄元年（1688）から昭和２年まで44件の大規模な火災が把握された。

棟札に記載されている建替え年代と火災の年代を対比したところ、棟札の紀年から数年前にかけて発生している火災は認められなかった。そのことから、火災に伴う建替えおよびそれに伴う棟札はないものと考えられる。

棟札資料からは、土崎神明社が火災で焼失したことはないと考えられる。

また、土崎神明社境内地の一部を発掘調査した結果においても、火災に伴う焼土面や焼土炭化物層は確認されていない。

※引用参考文献

『土崎港町史』、秋田市役所土崎出張所、1941年

『湊城跡－秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成18年度調査区）－』、秋田市教育委員会、2008年

（２）秋田市内の棟札について　（別表８　秋田市内で調査・報告された棟札一覧参照）

秋田市内で調査・報告された棟札資料については、慶安３年（1650）から昭和62年まで、土崎神明社を含め94点が把握された。

秋田市内の棟札資料としては、土崎神明社の棟札は最も古いものとして位置づけられる。また、同一の寺社の建替えを示す棟札資料としては、土崎神明社の他に、正八幡宮、八幡秋田神社（大八幡神社）、金刀比羅神社があるが、土崎神明社が最も多く、期間についても江戸時代から近現代にかけて最も長期にわっている。

それらのことから、土崎神明社の棟札は、社寺の建築記録を示す棟札資料としても重要な資料として位置づけられる。

参考文献

【市史・町史・報告書等】
『土崎湊町史』、秋田市土崎出張所、1941年
『土崎湊祭りの曳山行事』、秋田市教育委員会、1993年
『山梨県棟札調査報告書　郡内Ⅰ』、山梨県教育委員会、1995年
『山梨県棟札調査報告書　国内Ⅰ』、山梨県教育委員会、1996年
『山梨県棟札調査報告書　河内Ⅰ』、山梨県教育委員会、1997年
『社寺の国宝・重文等　棟札銘文集―東北編―』、国立歴史民俗博物館、1998年
『秋田市史』、第十巻　近世史料編下、秋田市、1999年
『秋田市史』、第十五巻　美術工芸編、秋田市、2000年
『秋田市の文化財』、秋田市教育委員会、2001年
『土崎神明社祭の曳山行事伝承活用テキスト』、秋田市教育委員会、2002年
『秋田市史』、第三巻　近世通史編、秋田市、2003年
『秋田市湊城跡－秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成18年度調査区）』、秋田市教育委員会、2008年
『秋田市湊城跡－秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成19年度調査区）』、秋田市教育委員会、2009年
『秋田市湊城跡－秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成20年度調査区）』、秋田市教育委員会、2009年

【著書】
渡部景一『秋田市歴史地図』、無明舎出版、1984年
佐藤正彦『天井裏の文化史　棟札は語る』、講談社、1995年
金森正也『近世秋田の町人社会』、無明舎出版、1998年
水藤　真『棟札の研究』、思文閣出版、2005年

【展示図録】
『中世の棟札　神と仏と人々の信仰』、横浜市歴史博物館、2002年

平成二十九年度指定文化財

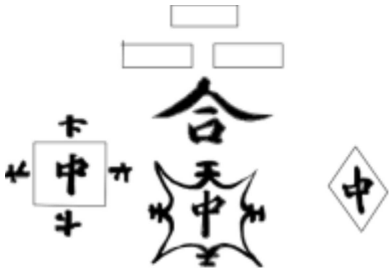
土崎神明社棟札

別紙１

土崎神明社棟札釈文

土崎神明社棟札１　（慶安３年）

（表）



聖主天中天
迦陵頻伽聲

惣戒師釈迦牟尼如来

哀愍衆生者
我等令敬礼

大行事帝釋天王
今目戒師弥勒菩薩
碑文殊師利菩薩

願以此功徳
普及於一切

願主　川瀬嘉右衛門
同主　小川弥五左衛門
奉加湊惣中

鍛冶等
蒔町太兵衛

奉造立伊勢天照太神宮壹宇

諸誠事大梵天王
諸行事普賢菩薩
戒行事観世音菩薩

我等與衆生
皆共成仏道

大工　窪田金拾郎
小工　酒田町與兵衛
大歳　別当三光院
慶安三年卯月吉祥日
庚寅

窪田久五郎
寺内久四郎

敬白

（裏）

第二号

寸法	上辺	23.1
	下辺	23.2
	長さ	76.8
	厚さ	端1.5
		中1.1
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		有

棟札1（表）

（裏）

土崎神明社棟札２　（寛文10年）

（表）

聖主天中天　　大行事帝釋天王　　願以此功徳
迦陵頻伽聲　　今目戒師弥勒菩薩　　願主　相澤吉兵衛
　　碑文殊師利菩薩　　同主　赤尾佐左衛門
惣戒師釈迦牟尼如来　　奉迦湊惣中
哀愍衆生者　　諸誠事大梵天王　　普及於一切
我等令敬礼　　諸行事普賢菩薩　　奉造立伊勢天照大神宮壹宇
　　戒行事観世音菩薩　　我等與衆生
　　大歳　寛文拾年　庚戌　　皆共成仏道

大工窪田
古屋又兵衛住湊
大工杢左衛門
石川喜右衛門
冨樫
秋田寺内住人
古屋門三郎藤原○○
井○甚太郎
古屋六兵衛
別当
龍蔵院圓長

（裏）

三号

寸法	上辺	22.4
	下辺	22.3
	長さ	76.2
	厚さ	上・中1.5
		下端1.9
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		有

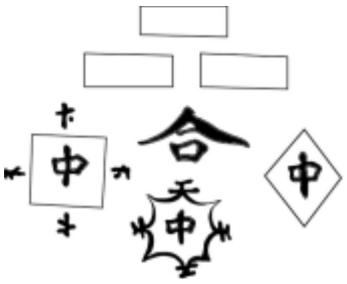
棟札２

（表）

（裏）

土崎神明社棟札３　（元禄４年）

（表）



聖主天中天
迦陵頻伽聲

大行事帝釋天王
今目戒師弥勒菩薩
碑文殊師利菩薩

惣戒師釈迦牟尼如来

諸誠事大梵天王
諸行事普賢菩薩
戒行事観世音菩薩

哀愍衆生者
我等令敬礼

願以此功徳
普及於一切

願主相澤治左衛門
同主駒野屋平左衛門
大工冨樫伊兵衛

奉葺替伊勢天照大神宮壹宇

別当羽州湊
龍覺坊
大歳
年八月吉祥日
辛未

我等與衆生
皆共成仏道

于時元禄四

（裏）

四号

大工久保田通町惣兵衛
同町伊左衛門
保戸野町万右衛門

寸法	上辺	19.8
	下辺	19.5
	長さ	80.7
	厚さ	1.2
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		有

棟札３　（表）

（裏）

土崎神明社棟札４　（正徳２年）

（表）

実相真如日輪者
照生死長夜之闇

導師　長生院大越家阿闍梨良山
清覺院大越家阿闍梨清澄
別当　三光院権大僧都

大工　川口弥惣兵衛
吉田庄八　髙橋伊左衛門
工藤伊兵衛　川口与兵衛
吉田万蔵
鍛冶　清三郎　敬

奉修造伊勢大神宮御堂一宇　奉為大檀那源朝臣義格公国家安全御武運長久

本有常住月輪者
払無明煩悩之雲

于時
正徳二壬辰九月廿六日

本願主　長谷川七郎兵衛　神馬清右衛門　白
相澤治左衛門　駒野屋平左衛門
舟木助左衛門　鍋屋弥治衛門
湊惣町中

（裏）

五号

丁代

穀保町　五左衛門
新城町　佐藤左衛門
上酒田町　茂右衛門
酒田町　六郎左衛門
永覚町　徳左衛門
加賀町　善吉
小鴨町　八郎兵衛
萱村町　惣九郎
かつき町　四郎兵衛
新町　惣左衛門

寸法	上辺	20.9
	下辺	20.9
	長さ	84.6
	厚さ	1.6
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札4（表）

（裏）

土崎神明社棟札５　（享保５年）

（表）

封

享保五庚子歳

導師　権大僧都阿闍黎大越家清覚院清澄

別当　権大僧都三光院

本願主　相澤次郎衛門　越後屋市右衛門

岩谷新助　尾張屋弥兵衛

棟梁　久保田大工

同　宇佐見作十郎

同　苗藤十郎

同　藤兵衛

河越重右衛門

石山市郎兵衛

鍛冶　村田多治衛門

横山庄兵衛

佐藤長十郎

佐々木庄兵衛

見形三五兵衛

◯

奉葺替伊勢太神宮一宇奉為国主源朝臣義峯公御武運長久国家安全

六月十六日

庄屋　神馬清九郎　丁代　川口仁兵衛

小松太治兵衛　辻市兵衛

小納屋小兵衛

湊惣町中　小鴨弥兵衛

小納屋甚兵衛

小林甚太郎

越前屋四郎兵衛

佐々木利左衛門

古木五兵衛

金子惣左衛門

封

（裏）

諸仏救世者　住於大神通

為悦衆生故　現無量神力

穣○如意　封

欽言　封

寸法	上辺	20.5
	下辺	20.5
	長さ	92.6
	厚さ	1.2
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札5（表）

（裏）

土崎神明社棟札６　（元文５年）

（表）

元文五庚申歳　　導師　大越家

為悦衆生故　　阿闍梨　清覚院住清隆
　　清文珠院住秀曲
　　別当権大僧都三僧祇三光院良鏡

◯

奉造替内外太神宮社一宇大守御武運長久国家安全処

当津庄屋　藤林平右衛門　　本願主

神馬清九良

現無量神力

九月廿六日

相澤治左衛門　　杉山藤兵衛
深谷惣左衛門　　遠藤小兵衛
岩谷新助　　間杉五良八
船木助左衛門　　深谷久兵衛

町代十人

川口六郎兵衛
木田縫殿右衛門
遠藤孫兵衛
徳山吉右衛門
古木儀兵衛
二木市良兵衛
菊地庄左衛門
小林甚太郎
岡田七兵衛
能登屋久右衛門
大工　堀江佐左衛門
　　川口吉郎右衛門

（裏）

七号

孫兵衛　久五郎
伊左衛門　仁三郎
庄九郎　長兵衛
興兵衛　金六
彦三郎　新八
孫三郎　五郎兵衛
左五兵衛
八兵衛　木挽五郎兵衛
寄松
三郎兵衛
長兵衛　喜平治
久五郎　武兵衛
与右衛門　松之助
惣四郎
弥治兵衛

寸法	上辺	20.5
	下辺	19.0
	長さ	92.0
	厚さ	1.7
頭部形状		尖頭
材質		カツラ
釘穴		無

棟札6（表）

（裏）

土崎神明社棟札７　（宝暦10年）

（表）

本体盧遮那
久遠成正覚

宝暦十庚辰歳

導師
大越家阿闍梨金性院圓克
清覚院大先達法印清隆

本願主
相澤治左衛門
川口弥左衛門
岩谷新助

間杉五良八
杉山藤兵衛
舩木助左衛門
深谷惣左衛門
同　曽兵衛

大工
堀江佐左衛門
越前屋重右衛門

封

◯

奉葺替内外太神宮社一宇御国主御武運長久国家安全当所繁昌所

為度衆生故
示現大明神

六月十六日

別当権大僧都三僧祇三光院良鏡
藤林徳左衛門
当津庄屋
神馬清九郎

町代
相澤治右衛門
古木義兵衛
小谷部嘉右衛門
小嶋三良右衛門
杉山與十郎

伊藤権兵衛
舩木八右衛門
貝田新右衛門
桜田文左衛門
大野庄左衛門

木挽
五良兵衛

封

（裏）

持国天王　一切日皆善　一切宿皆賢　諸仏皆威徳
増長天王
広目天王　羅漢皆行満　以斯誠実言　願我常吉祥
多門天王

寸法	上辺	23.3
	下辺	20.3
	長さ	92.7
	厚さ	1.5
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札7（表）

（裏）

土崎神明社棟札８　（明和６年）

（表）

明和六己丑年

導師　性善房清壽
別当　権大僧都三僧祇三光院良鏡
願主　川口弥左衛門　相沢丈右衛門
岩井五良八　泉屋善助

世話役
岩屋市郎右衛門
同　髙橋清右衛門
越後屋惣左衛門
川口七郎兵衛
久米源右衛門

奉改造伊勢太神宮内殿一宇　奉為国主源朝臣義敦公御武運長久国家安全

九月廿一日

萩庭弥市重僖
十町丁代
川口小助
佐地藤右衛門
水巻吉右衛門
岩屋作兵衛
新保七左衛門
伊勢屋孫左衛門
石川長左衛門
山村与十郎
平沢善兵衛
須田安右衛門

庄屋
神馬清九良
藤林徳左衛門
湊惣町中

（裏）

諸仏救世者　住於大神通
為悦衆生故　現無量神力

京師　須田安左衛門方行門人
大工　横山重右衛門
同　福山杢左衛門
同　館山三郎兵衛

金具師
同　赤平市兵衛
同　佐々木治助
内海祐七

木挽　傳左衛門

九号　寸　圭

寸法	上辺	24.2
	下辺	24.1
	長さ	98.3
	厚さ	2.7
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札８　（表）

（裏）

土崎神明社棟札９　（安永９年）

（表）

天神地祇
八百萬神　安永第九庚子暦　大導師秋葉坊圓眞大和上
別当権大僧都三僧祇三光院慶鏡

大工　棟梁
奈良崎甚左衛門
川口太郎兵衛
館山三郎兵衛
川口彌兵衛

奉葺替内外太神宮社一宇大守源義敦公御武運長久国家安全当所繁昌所

天下泰平
宝祚延長
六月十二日
当津庄屋
神馬清九郎
藤林徳左衛門
町代
中野三郎右衛門
三國屋善助
岩見屋清四郎
三國屋四郎右衛門
帋谷市郎兵衛
木村彦右衛門
越後屋善四郎
山村與十郎
平澤長兵衛
藤田長三郎
木挽
吉田五郎兵衛
鍛治
赤平市兵衛

（裏）

謹請再拝々々今年今月午乃時乎以豆祓所乃八百萬乃神達乃広前尓円眞恐美恐美毛申須円眞
雖致精進乃誠触縁仁自従類眷属仁付天不信懈怠乃事毛相交良牟恐美依
思給中臣乃祭文以豆祓申清申状於平介久安介久聞食止啓須

寸法	上辺	30.4
	下辺	30.4
	長さ	106.3
	厚さ	2.2
頭部形状		尖頭
材質		マツ
釘穴		有

棟札９（表）

（裏）

土崎神明社棟札10　（天明３年）

（表）

身躰護神三元加持　当国主公源義敦御武運長久

大導師別当
権大僧都三光院慶鏡法印

◯

奉寄進天照豊受両大神宮御宝前幕壱張　当所繁栄請災消滅　祈所
町内安全福招増長

五大神王全神守護于時天明三癸卯年林鐘十五有龍集

庄屋　藤林徳左衛門
同　神馬清九良

御米方
御用聞九人

（裏）

五大龍王
興穿地神諸大眷属等
八大龍王

町代
山村与十郎
中野三郎右衛門
三国屋善助
紙屋市郎兵衛
川口勘兵衛

加々屋惣八
松本与右衛門
岩間長九良
藤田市右衛門
片村庄九良

寸法	上辺	18.9
	下辺	16.7
	長さ	90.8
	厚さ	1.4
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札10（表）

（裏）

土崎神明社棟札11　（天明３年）

（表）

于時天明三癸卯年　別当　三光院慶鏡　寄賦　御米方

奉建立天照豊受両皇太神宮鳥居一宇御国主武運長久国家安全町内無難氏子繁栄処

林鏡十五有龍集　願主湊惣町　庄屋　藤林徳左衛門　町代　山村與十良　中野三良右衛門　三國屋善助　紙屋市良兵衛　飯塚久兵衛　神馬清九郎　川口勘兵衛　賀加屋宗八　松本與右衛門　藤田市右衛門　賀加屋小兵衛

（裏）

羽州秋田郡土崎湊神明宮鳥居

大工当所　奈良長治良　伊藤兵右衛門　飯山三良兵衛　堀江彦三良　吉田五良兵衛

木挽当所

寸法	上辺	29.9
	下辺	26.9
	長さ	154.6
	厚さ	上端3.2
		下端2.6
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札11（表）

（裏）

土崎神明社棟札12　（寛政５年）

（表）

大導師
心上護神三元加持当国主公源義和御武運長久
権律師歓峯宥章

奉寄進天照豊受両皇大神宮御宝前敷石子孫繁昌当所繁栄所

社頭司別当権大僧都三光院明鏡
○○自消心月澄明于時寛政五年丑十月吉祥日
大願主長岡屋源右衛門

（裏）

五大龍王　庄屋藤林徳左衛門
堅牢地神諸大眷属等助力願主
八大龍王　同　神馬清九良

町代
山村与十郎
川口勘兵衛
藤田市右衛門
加々屋利左衛門
岩谷作兵衛

伊勢屋太郎左衛門
宮崎惣左衛門
中野三郎右衛門
二木市郎兵衛
戸嶋十左衛門

大工棟築
五郎兵衛
久四郎
庄左衛門
久蔵

寸法	上辺	21.0
	下辺	19.0
	長さ	107.0
	厚さ	1.3
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札12（表）

（裏）

土崎神明社棟札13　（寛政８年）

（表）

于時寛政八丙辰龍暦

別当
三光院

奉修神明宮御懸額開眼法供　大旦越

源義和公　御武運長久五穀成就入船増長当所繁昌　祈処

八月大吉祥日

当寺八世現住
明鏡法印

（裏）

彫刻
瀬谷彦左衛門藤原勝遠

庄屋
藤林徳左衛門
神馬清右衛門

丁代
加賀屋理左衛門　中野三郎右衛門
藤田市右衛門　船越屋久五良
二木市良兵衛　工藤忠右衛門
伊勢屋多良左衛門　泉屋定四良
宮崎惣左衛門　佐藤彦三良

大工
石田吉良右衛門
木屋三良右衛門

寸法	上辺	27.0
	下辺	21.0
	長さ	84.0
	厚さ	2.0
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札13

（表）

（裏）

土崎神明社棟札14　（寛政12年）

（表）

聖主天中天　大行事帝釈天王
迦陵頻迦繁　今日戒師慈師井　于時寛政十二年
碑文文殊支利井　大導師権大僧都大善院光良
別当九世三光院眞鏡

奉造立天照皇太神宮宝社一宇大旦那御武運長久国家安全五穀豊饒氏子除災堅固入船無難諸民快楽所

哀愍衆生者　諸誡大梵天王
我等令敬礼　諸行事普賢井
戒和尚弥勒井

庚申
六月十六日

大工　山添治良兵衛　封
川口弥兵衛
木挽　吉田屋五郎兵衛
同　能登屋五兵衛

庄屋　藤林徳左衛門
神馬清右衛門

町代　浪岡利右衛門
長濱屋甚左衛門
杉山仁兵衛

世話役　小納屋久右衛門
加賀屋清九郎
長岡屋源右衛門　封

（裏）

拾壱号

南无堅牢地神諸眷属
南无五帝龍王持者眷属

寸法	上辺	36.0
	下辺	36.3
	長さ	122.8
	厚さ	4.2
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札14（表）

（裏）

土崎神明社棟札15　（文化14年）

（表）

別当
三光院

文化十四丁丑天

奉建立神明宮石華表天下泰平国家安全願主家内安穏当処繁晶百事吉祥所

九月大吉辰

大願主
小西傳助
藤林平右衛門
庄屋
神馬清兵衛

丁代
間杉専右門
齊藤忠四良
小野屋儀兵衛
菅與左門
小玉源右門

新保長右門
佐々木庄助
岩谷作兵衛
宮崎惣右門
越前屋太右門

（裏）

惣願主
川口八左門
杉山藤兵衛
間杉忠助
岩見屋五良右門
小西市十良
川口長左門
金沢屋彦右
金子清四良
岩城仁左門

藤田傳兵衛
岸喜兵衛
船木新蔵
根布屋午之助
岩城喜左門
加賀屋利兵衛
佐々木市右門
奥州屋儀助
谷野甚左門

佐々木與助
木村由兵衛

惣施主中

諸大眷属擁護

寸法	上辺	23.8
	下辺	22.1
	長さ	83.7
	厚さ	1.0
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札15（表）

（裏）

土崎神明社棟札16　（文政元年）

（表）

別当
三光院

文政元戊寅稔

奉再建神明宮華表一基当国大守君御武運長久当所繁昌惣願主家内安全祈祷処

仲夏二十五辰

惣願主庄屋　藤林平右衛門
神馬清兵衛

丁代

間杉専右衛門　新保長右衛門
齊藤忠四良　佐々木庄助
小野屋儀兵衛　岩屋作兵衛
菅與右衛門　宮崎惣右衛門
小玉源右衛門　越前屋多右衛門

（裏）

大工

山内善八
山添治良兵衛
能登屋五兵衛
吉田五良兵衛

木挽

堅牢地神部類眷属

寸法	上辺	25.6
	下辺	24.4
	長さ	88.1
	厚さ	2.8
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札16（表）

（裏）

土崎神明社棟札17　（文政３年）

（表）

聖主天中天
迦陵頻伽聲

大行事帝釈天王
今目戒師慈菩薩
碑文文殊利菩薩

于時文政三年

大導師胎輪寺良敬　勘定役　小野屋儀兵衛
別当十世　中野三良右衛門
三光院弁鏡　御普請世話方　小野屋儀兵衛
菅與左衛門
新保長右衛門
岩谷作兵衛

大工棟梁　山内善八
木挽　吉田屋五郎兵衛
山添喜太郎
能登屋五兵衛

奉建立天照皇大神宮宝社一宇大旦那御武運長久国家安全五穀豊饒氏子除災堅固入船無難諸民快楽所

哀愍衆生者
我等令敬礼

諸誠事大梵天王
諸行事普賢菩薩
戒和尚弥勒菩薩

庚辰
六月十七日

庄屋　藤林平右衛門
神馬清兵衛

丁代　間椙専右衛門
齊藤忠四郎
小野屋儀兵衛
菅與左衛門
新保長右衛門

小玉源右衛門
佐々木宇兵衛
岩谷作兵衛
宮崎惣左衛門
越前屋太兵衛

封　封

（裏）

拾二号

南無堅牢地神諸眷属
南無五帝龍王持者眷属

大工　川口弥兵衛
館山三郎兵衛
小林萬蔵
山添清治郎
川口新蔵
松澤五左衛門
戸谷沢久吉
高橋清助
泉田由松
吉蔵清蔵

組下　鍛冶　赤平市兵衛
須藤五郎左ヱ門

萱手　専之助
庄左ヱ門
太十郎

石工　三十郎

木挽組下　川村久蔵
石田彦兵衛
斎藤勘兵衛

諸職人手先
藤四郎

寸法	上辺	27.2
	下辺	25.6
	長さ	94.1
	厚さ	2.5
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札17（表）

（裏）

土崎神明社棟札18　（天保８年）

（表）

天保八丁酉天

別当
三光院十一世現住弘鏡

庄屋　藤林平右衛門
同加談　神馬清兵衛
発願主　村上市兵衛
真鍋喜兵衛

山王丸九右衛門

奉寄附神明宮御神鏡一面惣願主家運長久如意吉祥攸

十月吉良辰

助願主
石田直治
岩谷儀兵衛
杉山七蔵
間杉儀助
川口長左衛門

佐藤彦三良
中村重兵衛
三國屋和兵衛
小納屋新四郎

（裏）

裏銘執筆
介川東馬通景

鏡台細工師
中山新六郎

鋳物師
土橋市五良

堅牢地神

寸法	上辺	28.8
	下辺	25.5
	長さ	96.3
	厚さ	2.3
頭部形状		尖頭
材質		マツ
釘穴		無

棟札18（表）

（裏）

土崎神明社棟札19　（天保12年）

（表）

大行事帝釈天王
聖主天中天　于時
今目戒師慈師菩薩　天保十二年
迦陵頻伽聲　別当十一世
碑文文殊支梨菩薩　三光院阿闍梨弘鏡

導師神王寺阿闍梨玉豊
駅馬方御用係
岩谷四郎兵衛
中野三郎右衛門
勘定役
小埜谷儀兵衛

御普請御蔵元
山添治郎兵衛
御普請係　元締役　真鍋喜兵衛
大工棟梁
山添清治郎
同　小埜谷儀兵衛
吉田屋五郎兵衛
同　須磨屋清九郎
木挽棟梁
同世話方　寺岡治右衛門
藤助
間瀬永吉

奉造立天照皇太神宮宝社一宇太守義厚公御武運長久国家安全五穀豊饒氏子除災堅固入船無難諸民快楽攸

諸試大梵天王
哀愍衆生者　辛丑
諸行事普賢菩薩　九月二十一日
我等令敬礼
戒和尚弥勒菩薩

神主
土崎千里介藤原宗直
庄屋　神馬清兵衛
同加談　山王丸九右衛門
村上市兵衛

永覚町
岩谷作兵衛
上酒田町
丁代　吉田喜兵衛
小鴨町
三浦捨松
新城町
櫻屋太郎兵衛

下酒田町
須磨屋清九郎
萩町
竹内與右衛門
新町
寺岡治右衛門
肴町
小林甚太郎

加賀町
下田又兵衛
穀保町
中野三郎右衛門
新柳町
虎屋文蔵

（裏）

拾三号

南無堅牢地神諸眷属
南無五帝龍王持者眷属

大工組下
橋本藤之助
戸谷沢久吉
川口新蔵
山添鶴松
佐藤東助
佐藤専之助
須藤五郎左衛門
赤平市兵衛
池田捨杰
太治兵衛
山村甚兵衛

鍛冶
金具師
萱手
石工

塗師　大八木七郎右衛門
壁塗　山王丸善之助
雇頭　重吉
彦蔵

寸法	上辺	25.7
	下辺	23.8
	長さ	105.9
	厚さ	2.7
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札19（表）

（裏）

土崎神明社棟札20　（安政４年）

（表）

安政四丁巳天　別当　十二世三光院峯鏡△　願主

庄屋　村上市兵衛　丁代　滝澤屋五郎兵衛　大工棟梁　山添治郎兵衛

同　藤林平右衛門　同　長谷川屋久蔵　山添清治郎

同見習　神馬幾蔵　同　安田屋儀右ヱ門　山添鶴松

同　木村屋康之助

奉再建神明宮鳥居一基当国大守君公御武運長久当所繁昌惣願主家内安全長日祈処

六月初十二日　神主　土崎千里介藤原宗春△

勘定役　岩見屋市蔵　同　間瀬屋新助　戸谷沢久吉

同見習　藤林老之助　同　小形屋七十郎　房吉

丁代　山王丸屋小左衛門　同　小田嶌屋佐兵衛　源蔵

同　岩屋嘉三郎　同　萬屋周助　敬白

同　塩野屋清兵衛　圭

寸

（裏）

堅牢地神部類眷属

寸法	上辺	26.7
	下辺	24.0
	長さ	98.8
	厚さ	2.3
頭部形状		尖頭
材質		マツ
釘穴		無

棟札20（表）

（裏）

土崎神明社棟札21　（文久２年）

（表）

本体盧遮那
久遠成正覚　維時文久第二星次壬戌
風雨順時五穀成就萬民豊楽惣町安全

導師別当三光十二世大越家峯鏡△
庄屋　神馬幾蔵
藤林老之助　勘定役
庄屋見習　神馬喜太郎　勘定役兼務
岩見市蔵
佐々木正助
御普請元締役
加々屋東十郎
加々屋助右エ門
御普請係役
間瀬新助
本庄平八

玉鏡　◯　奉修理皇太神宮宝殿伏願大檀那御武運長久　所

為度衆生故　事六月吉祥辰修遷座軌則
火盗辟除賈舶輻湊売買利潤各願満足
神主　土崎千里介藤原宗直
山王丸小左衛門　木村庫之助
本庄平八
小田島喜右衛門
惣丁代　瀧澤五郎兵衛　間瀬新助
萬屋福蔵
示現神冥神
長谷川久蔵　幸野新蔵
小形屋七蔵

（裏）

拾四号

堅牢地神土公眷属
五郎兵衛
木挽棟梁
壁塗
山口屋専松
子供傳之助

無上霊宝神道加持
大工棟梁
山添治郎兵衛
脇棟梁
山添清治郎
杉山鶴松

五帝龍王降臨副護
塗師
大八木七郎右衛門
雇頭
彦蔵
重吉
萱手
四ツ屋村
熊太郎

北水

寸　圭

寸法	上辺	27.6
	下辺	24.9
	長さ	101.0
	厚さ	2.5
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札21（表）

（裏）

土崎神明社棟札22　（明治10年）

（表）

祠官
祠掌　権大講義　井口糺
少講義　土﨑眞澄
権訓導　伊藤要太

奉葺替郷社神明社拝殿一棟氏子惣町繁昌祈処

氏子惣代普請世話方
訓導　櫻井保蔵
願主　氏子惣町中

（裏）

大工棟梁　山添治郎兵衛
萱手　加藤勘之丞
雇頭　木村辨蔵

明治十年十月二十日

寸法	上辺	21.3
	下辺	19.9
	長さ	70.9
	厚さ	2.4
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札22（表）

（裏）

土崎神明社棟札23　（明治16年）

（表）

土嵜港氏子

奉修覆県社神明社一宇鳥居一基棟符

安全守賜布処

（裏）

祠掌　少講義　土崎眞澄峯鏡
同　訓導　伊藤要太金武
権訓導　土嵜宮栄昭鏡

明治十五年首部

下酒田町戸長　真鍋長壽
穀保町戸長　石野勘助吉
新城町戸長　加賀谷保吉
上酒田町戸長　中野喜兵エ
永覚町戸長　近藤源八
加賀町戸長　青崎吉助
小鴨町戸長　間瀬新助
肴町戸長　山村與十之助
萩町戸長　二木市良右エ門
新町戸長　小形文右エ門
愛宕町戸長　石田文蔵
清水町戸長　金子清四郎
旭町戸長　長村與五郎
本山町戸長　小室倉太
新柳町戸長　佐藤幸吉
壱騎町戸長　平澤五良助
稲荷町戸長　藤山佐兵

明治十五壬午年

社頭御造営係
川口清吉
間瀬新助
小形文右エ門
同副世話係
後藤政吉
蔵元
竹内長九郎
各町世話係
小野吉右エ門
越後谷久治
遠藤繁松
越後谷周吉
山田政吉
山王丸小左衛門
竹内長九郎
青嵜吉助
安田常吉
越後谷萬蔵

御造営之処

泉田鶴治
岩見五兵衛
中山祐助
石田為治
井上甚治
小笠原栄吉
松山末吉
石田茂吉
長濱三太良
中田永吉
御棟札寄進願主
越後谷惣左エ門

大工棟梁　山添治良兵エ
副棟梁　石井富治
同　杉山甚治
木挽棟梁　松沢勇吉
萱手　吉田五良兵エ
金具師　鎌田惣之丞
鍛冶　池田喜市
畳指　須藤五良左エ門
壁塗　中田永吉
雇頭　梅田兼松
同　大濱三之助
木村辨蔵

明治十六癸未年

御遷宮式執行

拾五号

寸法	上辺	27.2
	下辺	24.2
	長さ	102.0
	厚さ	2.1
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札23（表）

（裏）

土崎神明社棟札24　（明治30年）

（表）

寄附人　土崎港町　山田粂吉
壱騎町　山田兼吉

奉葺替　神明社本殿屋根一棟

社司　土崎真澄謹白

（裏）

明治三十年七月廿日旧六月廿一日
禎祥永集祈攸
四ツ谷村
萱手　佐藤兼吉

寸法	上辺	30.3
	下辺	30.0
	長さ	91.0
	厚さ	2.8
頭部形状		平頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札24（表）

（裏）

土崎神明社棟札25　（明治36年）

（表）

奉修覆県社神明社殿一宇　氏子安全乃攸

（裏）

社司　土崎武司　氏子総代

社掌　伊藤本枝　加賀谷保吉

社掌　土崎鉄太郎　髙橋吉兵衛

明治三十六癸卯年七月廿六日

御遷宮式執行

原田文五郎　佐々木寅吉　近江谷榮次　石田文五郎　蔵元

穀保町惣代　須磨與十郎　御蔵町惣代　佐々木良吉　新城町惣代　上野口平治　酒田町惣代　下酒田町惣代　佐藤吉治　山王丸小左エ門　永覚町惣代　岩谷豊治　加賀町惣代　加賀谷東十郎　小鴨町惣代　門間傳吉　肴町惣代　小林吉十郎

萩町惣代　木村末吉　新町惣代　小林時松　能登谷仁三郎　古川町惣代　館山冨太郎　新柳町惣代　長野谷長四郎　愛宕町惣代　棟札寄進願主　越後谷惣左エ門　清水町惣代　加藤末吉　清水町惣代　伊藤常吉　金澤源吉　本山町惣代　石田芳之助　旭町惣代　小野新吉　壱騎町惣代　中田永吉

稲荷町惣代

大工棟梁　山添永吉　萱手棟梁　佐藤兼吉　雇頭　熊谷小市

拾六号

寸法	上辺	26.9
	下辺	23.8
	長さ	101.9
	厚さ	3.7
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札25（表）

（裏）

土崎神明社棟札26　（明治38年）

（表）

奉再建大鳥居一基氏子安全祈攸

（裏）

明治三十八年五月吉日

氏子

社司　土崎武司

社掌　伊藤本枝

土崎鉄太郎　加賀谷保吉　総代　高橋吉兵エ　石田文五郎　佐々木寅吉　近江谷榮次

蔵元　石田文五郎

各町総代　穀保町　石野谷勘助

刈田義門　御蔵町　佐々木良吉　新城町　小野又吉　上酒田町　佐藤吉治　下酒田町　山王丸小左エ門

永覚町　岩谷豊治　加賀町　加賀谷東十郎　小鴨町　門間傳吉　肴町　小林吉十郎　萩町　木村末吉　新町　髙井鶴五郎　新柳町　山本菊太郎

愛宕町　長野谷長四郎　清水町　伊藤常吉　泉谷久造　三森清治　本山町　柴田忠吉　旭町　三國谷四郎右エ門　古川町　舘山冨太郎　稲荷町　能登谷仁三郎

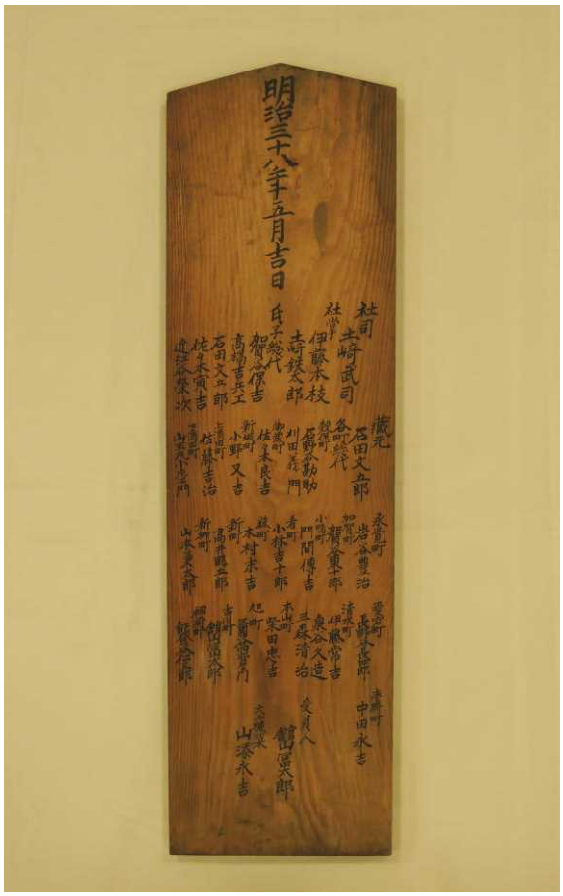
壱騎町　中田永吉

受負人　舘山冨太郎

大工棟梁　山添永吉

寸法	上辺	24.4
	下辺	22.1
	長さ	81.9
	厚さ	2.3
頭部形状		尖頭
材質		マツ
釘穴		無

棟札26（表）



（裏）

土崎神明社棟札27　（大正12年）

（表）

奉建立県社神明社大鳥居一基

（裏）

大正十二年七月　遷宮

紀念　願主御蔵町

若者頭　館山吉郎
前田和市

総代　館山松太郎
前田治平

世話役　館山榮三郎
伊藤銀蔵
大工棟梁　松澤喜一郎

大工　松澤兼吉
川村喜太郎
木曽保蔵
中川天一郎
仕事師　刀田喜助

寸法	上辺	26.7
	下辺	23.7
	長さ	100.7
	厚さ	3.0
頭部形状		尖頭
材質		ヒバ
釘穴		無

棟札27（表）

（裏）

土崎神明社棟札28　（大正12年）

（表）

奉修繕県社神明社　社殿一宇

（裏）

社司　土崎武司
社掌　伊藤本枝
社掌　土崎正鏡

氏子総代
野口銀平
金澤慶吉
村山嘉太郎
越後谷惣左ヱ門
穀保町総代
小野吉右ヱ門
浅野千代吉
御蔵町総代
舘山松太郎

新城町総代
橋本周吉
上酒田町総代
細川政治
下酒田町総代
藤井敬治
永覚町総代
船木松五郎
加賀町総代
藤本政治
小鴨町総代
石野熊吉
肴町総代
加賀谷喜代松

萩町総代
山田要助
新町総代
小林時枩
幕洗川総代
武田榮隆
愛宕町総代
門間金右ヱ門
新柳町総代
佐藤寅五郎
将軍野幕洗川総代
池田喜助
清水町第一区総代
舩木定五郎

清水町第二区総代
寺庭隆賢
全町第三区総代
武田忠助
本山町総代
柴田忠吉
旭町第一区総代
山内永治
全第二区総代
松田喜太郎
全第三区総代
石田道正
古川町総代
舘山富太郎

稲荷町総代
能登谷仁三郎
壱騎町総代
保坂久治

工事監督　板垣音弥
大工棟梁　杉山甚治
幅棟梁　塩谷辰之助
屋根葺　鈴木東四郎
左官　山田三之助
雇頭　戸田喜助

大正十二年七月十九日
御遷座祭

寸法	上辺	29.3
	下辺	26.5
	長さ	115.3
	厚さ	3.5
頭部形状		尖頭
材質		ヒバ
釘穴		無

棟札28（表）

（裏）

土崎神明社棟札29　（昭和37年）

（表）

手置帆負神
屋船久久能知神
奉鎮祭　土崎神明社幣殿拝殿屋根修理
屋船豊受姫神
彦狭知神　玉橋

（裏）

奉納　銭谷小太郎

昭和三十七年十月吉日竣工宮司伊藤幸枝
鍼灸職　三浦多市　大工　深谷谷平
監督　三浦岩蔵　能登谷栄太郎　森本勝治　伊勢晃　村上信一

寸法	上辺	22.3
	下辺	下18.0
		最下10.3
	長さ	82.0
	厚さ	1.3
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札29

（表）

（裏）

土崎神明社棟札30　（昭和38年）

（表）

手置帆負命
屋船久久能知神
奉鎮祭　土崎神明社　拝殿
屋船豊受姫神　幣殿　修理
彦狭知命

（裏）

土崎神明社三百五十年祭記念　五名総代
加賀谷保吉
小野林平
木村末吉
杉山政雄
越後谷倉之助

昭和三十八年七月十日竣工宮司伊藤幸枝

施工者　建友土建　棟梁　鈴木　清
小形谷形郎　他大工一同
建具　京谷寅吉
塗装　保坂塗装店

寸法	上辺	22.1
	下辺	22.1
	長さ	95.3
	厚さ	1.5
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札30（表）

（裏）

土崎神明社棟札31　（昭和62年）

（表）

手置帆負命
屋船久久能知神
奉鎮祭　神明社本殿　幣殿
屋船豊受姫神　拝殿　修理
彦狭知命

（裏）

斎藤新二　杉山勇次
五名総代　加賀谷保吉
昭和六拾弐年拾弐月吉日　神明社宮司　銭谷象二郎　伊藤幸枝　松田金十郎
施工　建友土建株式会社　工事者　京谷重美　他大工一同
小方谷形郎　京谷正義

寸法	上辺	26.5
	下辺	20.8
	長さ	120.0
	厚さ	2.9
頭部形状		尖頭
材質		スギ
釘穴		無

棟札31（表）

棟札31（裏）

別表１　土崎神明社祭の曳山行事関連文献資料

	年号	西暦	内　　容	資料名
1	宝永元年	1704	外町　下米町の記録に土崎神明社の祭礼がはじめられたことが記述されている 宝永元年甲申年六月十六日ニ始而湊伊勢之宮ニ祭礼有	下米町一丁目記録
2	宝永２年	1705	宝永元年に旅人が神輿を寄進したために、神輿渡御を翌二年に行うことを寺社奉行に願いでる 湊鎮守　伊勢大神宮祭礼去申ノ年より御免被下候然は此度往来之旅人共御輿寄進仕候依之右之神輿湊御町中年々六月十六日ニ御旅披遊候様ニ惣氏子共奉願有之通被仰付被下候ハハ難有奉存候以上 宝永二年酉六月二日　別当　三明院　庄や　治右衛門　同　清右衛門　惣氏子中	国典類抄吉部
3	寛政元年	1789	土崎神明社の祭礼が囃子が演奏され、人々の衣装があでやかなに、非常ににぎやかに行われていることが記述されている。曳山は40という数の記載はあるが曳山の形などの記述はない 湊の祭はおもひしよりもいみじく、かねつゞみ糸竹のぐなどしらべあわせ、人ことにあやにしき引つゞけたる、いとみかほなり、あき人の舟つどふ処なれば、城下よりもことににぎはへるについて、かゝることにも心をやりてもうけなしたるなるべし	津村淙庵『雪のふる道』
4	文化元年	1804	土崎神明社の祭礼、灯籠の明かりが非常に明るいこと、多様な曳山、屋台、練り物などが出されていたこと、足の置く場もないほどの群集であったことが記述されている 二十日　今宵土崎伊勢祭禮夜宮。燈籠の光天を焦がす、數里の外より遙望しても湊の方晝のことし。翌二十一日祭行、山棚、屋臺、出し、遷物、藩中の壮観目を駭す。府中の商人よりも、縁家の方へ贈り屋臺とてあり。遠近在々まで群集して錐を立る地なし	人見蕉雨『秋田紀麗』
5	文化５年	1808	曳山の高さを３～４丈、木綿をかぶせていることを記述している 其舟の名も冷風丸と名つけて、日でりをしのぐ傘形岩、其風景も夏かしく、心やさしき追風と、つい土崎の浜へ打上がり、飄飄千斬湊の遊女町へと心ざす所、先御利昌の有神有神と上気を直すむねの内其断、産宮大神宮、其通り住吉大神を拝し奉り、夫より（此大神宮御祭礼は六月二十日二十一日、夜宮社内より町中灯籠ねり物夥し。岩山杯と号し三丈四丈位にて、木綿にてぎりぎりまきなり）	冷風丸道行草
6	文化11年	1814	祭礼前の大火により、神輿渡御のみの祭りとなる。 同年御神祭之義者、当前町萩町ニ候へ其五月出火之為御神輿斗御神幸のみ其外祭礼入料等者減少に相成候	土崎山記録
7	安政３年	1856	曳山の奉納に必要な費用の一覧表であり、人形代、人形着類の損料、山舁など記載から、人形が使われていたことや、現在はないかつぎ山があったこと等がわかる。 一、八十五貫文　右ハ人形着類の損料　　郷人 一、四百五貫文　右ハ人形弐人代　祐蔵 一、五拾五貫文　右ハ山舁五人壱日壱人一日〆出入代　新町　重五郎	山用諸掛覚
8	慶応２年	1866	慶応２年に統前町であった小鴨町において、加賀屋松三郎のもとに６人の町人が寄り合ってこの年の例祭の費用について相談するところから、庄屋に終了の報告を行うまでの記録である。人形の製作の人形拵え勇蔵への依頼、統前町山、小山があること、例祭の費用が160両にものぼり長屋・借家住まいの者も負担していたことなど、祭礼の状況が具体的に記述されている。 五月十日、月前加賀屋松三郎奥座敷江同役泉久・藤長・大長・水五・木勘・間瀬、月前共打寄り、此度之御神式統前執行ひ方相談ニ相成候所・・・略 当丁内は百六拾両余家毎割附可致之所、鰊割合統前之相当ル相当ル分三拾両引落、残百三拾両を以家毎割附可致決評ニ相成り申候・・・・略 人形拵勇蔵相呼統前町山并小山共注文致ニは、此節柄之事故貴様江為任置候間軽料ニ相成候様頼入遣申候処、追而絵図面持参之上代料可申上迚罷帰申候	御神式中統前諸用悉皆日記
9	明治11年	1878	黒木綿の男岩・女岩、松の飾り、滝の表現、人形による歴史場面の表現、運行での振り棒の使用など、現在の曳山に類似した状況が記述されている。 私たちはもっとも雑踏しているところへ出かけた、そこは大きな山車が二つあって、私たちは先ほどその巨大な建造物を遠くから眺めたのであった。30フィートも長さのある重い梁を組み立てたもので、中身のしっかりとした巨大な車輪が八個ついていた。・・・(中略)・・・上端には不揃いの高さの特殊な山が二つあった。全体は地面から50フィート近くあった。これらの突出部はすべて黒い木綿の布で包まれ、そこから松の枝が突き出していた。その上を縞のように白布が絶えず波うっていて、瀑布を象徴していた。底部には別の白布が並べてあって川を示し、青い布は下からふいごでひらひら揺らせて海をあらわしていた。全体が山をかたどり、神々が悪魔を打ち殺すさまをあらわしていた。・・・(中略)・・・これら二つの山車は、街路上を引かれて行ったり来たりしていた。引く男たちはそれぞれの車に二百人で、三時間で１マイルしか進まなかった。たくさんの男たちは、てこを使って重い車輪が泥にはまりこんでいるのを引き上げていた。	イサベラ・バード『日本奥地紀行』

10	明治16年	1883	多様な曳山、練物、鉾などが出されていたこと、年番の統前町により運営されていたことが記述されている。 六月 祭典　例年六月二十日、二十一日、宵祭灯火尤盛ンナリ。此日神輿御旅所へ神幸、供奉練物山鉾等町々ヨリ出ル。里俗之ヲ大祭ト云。家々ニテ祭典前ゴミ掃キトテ清静ニシ、或ハ畳ノ表替亦ハ児童ノ衣服調度ノタメ、呉服商家ハ大ニ取込事ナリ。此祭典、甲乙町の統前トテ、祭典ニ関係スル諸物品、甲ヨリ乙ノ町へ引渡シノ式アリ。・・・(中略)・・・二十日ノ夜ハ統前町ハ勿論、惣代等裃ヲ着シ、神明社ニ居コホレテ参拝ヲ遂ル。此夜惣町々ニ数万ノ灯籠ヲ点シ、白昼モ啻ナラズ。町々ニテハ煉物或ハ置人形亦タ引山ナント、大金ヲ抛テ美ヲ競ヒ・・・(後略)・・・	近藤源八『羽陰温故誌』
11	明治36年	1903	港町役場によって曳山の高さ等の規則が定められる。 一、曳山車ハ番号順序ニ依リ神事ニ供奉スルモノトスル 一、曳山車ノ番号ハ従来ノ手続キヲ以テ統前町ヨリ番号札ヲ配与スルモノトス 一、曳山車ノ車高サ地盤ヨリ六丈五尺ヲ越ユルヲ許サス 一、曳山車ハ爆発薬品ヲ用ユル危険ノ處アル趣向ハ之レヲ禁止ス 一、曳山車ハ中途ニシテ器具ノ破損等ヲ口實トシ横斜ニ位置ヲ換ヘ他町曳山車ノ　通行ヲ妨グル如キ所為アルヘカラス 一、曳山車へ餝ル偶ユハ其趣向ト意匠ニ依リ大ヒニ感動ヲ与フルモノナレハ成へ　ク道徳或ハ教育ノ一端トモナルヘキモノヲ選択スヘシ尚風俗ヲ害スル如キモノ　ハ勿論猥褻又ハ褒貶毀譽ニ渉サル様深ク注意スヘキヲ要ス	神明社祭務規程

別表２　土崎神明社棟札年代・種別一覧

番号	棟札対象建物	和暦	西暦	種別			
				遷宮	寄進	鳥居	修理
1	奉造立伊勢天照太神宮壹宇	慶安3年	1650	1			
2	奉造立伊勢天照大神宮壹宇	寛文10年	1670	2			
3	奉葺替伊勢天照大神宮壹宇	元禄4年	1691	3			
4	奉修造伊勢大神宮御堂一宇	正徳2年	1712	4			
5	奉葺替伊勢太神宮一宇	享保5年	1720	5			
6	奉造替内外太神宮社一宇	元文5年	1740	6			
7	奉葺替内外太神宮社一宇	宝暦10年	1760	7			
8	奉改造伊勢太神宮内殿一宇	明和6年	1769	8			
9	奉葺替内外太神宮社一宇	安永9年	1780	9			
10	奉寄進天照豊受両大神宮御宝前幕壱張	天明3年	1783		1		
11	奉建立天照豊受両皇太神宮鳥居一宇	天明3年	1783			1	
12	奉寄進天照豊受両皇大神宮御宝前敷石	寛政5年	1793		2		
13	奉修神明宮御懸額開眼法供	寛政8年	1796		3		
14	奉造立天照皇太神宮宝社一宇	寛政12年	1800	10			
15	奉建立神明宮石華表	文化14年	1817			2	
16	奉再建神明宮華表一基	文政元年	1818			3	
17	奉建立天照皇大神宮宝社一宇	文政3年	1820	11			
18	奉寄附神明宮御神鏡一面	天保8年	1837		4		
19	奉造立天照皇太神宮宝社一宇	天保12年	1841	12			
20	奉再建神明宮鳥居一基	安政4年	1857			4	
21	玉鏡〇奉修理皇太神宮宝殿	文久2年	1862	13			
22	奉葺替郷社神明社拝殿一棟	明治10年	1877				1
23	〇奉修覆県社神明社一宇鳥居一基	明治16年	1883	14			
24	奉葺替神明社本殿屋根一棟	明治30年	1897				2
25	奉修覆県社神明社殿一宇	明治36年	1903	15			
26	奉再建大鳥居一基	明治38年	1905			5	
27	奉建立県社神明社大鳥居一基	大正12年	1923			6	
28	奉修繕県社神明社　社　殿　一　宇	大正12年	1923				3
29	土崎神明社　拝殿　幣殿屋根　玉橋　修理	昭和37年	1962				4
30	土﨑神明社　拝殿　幣殿　修理	昭和38年	1963				5
31	神明社本殿　幣殿　拝殿　修理	昭和62年	1987				6

※番号は種別ごとの順番を示す

別表３　土崎神明社棟札記載内容・形状一覧

	記載内容					西暦	種別				寸法				形状	材質	釘穴
	表		裏				遷宮	寄進	鳥居	修理	上辺	下辺	長さ	厚さ			
1	奉造立伊勢天照太神宮壹宇	慶安三			第二号	1650	1				23.1	23.2	76.8	端 1.5 中 1.1	尖頭	スギ	有
2	奉造立伊勢天照大神宮壹宇	寛文拾			三号	1670	2				22.4	22.3	76.2	上・中 1.6 下端 1.9	尖頭	スギ	有
3	奉葺替伊勢天照大神宮壹宇	元禄四			四号	1691	3				19.8	19.5	80.7	1.2	尖頭	スギ	有
4	奉修造伊勢大神宮御堂一宇	正徳二			五号	1712	4				20.9	20.9	84.6	1.6	尖頭	スギ	無
5	奉葺替伊勢太神宮一宇	享保五				1720	5				20.5	20.5	92.6	1.2	尖頭	スギ	無
6	奉造替内外太神宮社一宇	元文五			七号	1740	6				20.5	19	92	1.7	尖頭	カツラ	無
7	奉葺替内外太神宮社一宇	宝暦十				1760	7				23.3	20.3	92.7	1.5	尖頭	スギ	無
8	奉改造伊勢太神宮内殿一宇	明和六			九号	1769	8				24.2	24.1	98.3	2.7	尖頭	スギ	無
9	奉葺替内外太神宮社一宇	安永第九				1780	9				30.4	30.4	106.3	2.2	尖頭	マツ	有
10	奉寄進天照豊受両大神宮御宝前幕壱張	天明三				1783		1			18.9	16.7	90.8	1.4	尖頭	スギ	無
11	奉建立天照豊受両皇太神宮鳥居一宇	天明三				1783			1		29.9	26.9	154.6	上端 3.2 下端 2.6	尖頭	スギ	無
12	奉寄進天照豊受両皇大神宮御宝前敷石	寛政五年				1793		2			21	19	107	1.3	尖頭	スギ	無
13	奉修神明宮御懸額開眼法供	寛政八				1796		3			27	21	84	2	尖頭	スギ	無
14	奉造立天照皇太神宮宝社一宇	寛政十二年			拾壱号	1800	10				36	36.3	122.8	4.2	尖頭	スギ	無
15	奉建立神明宮石華表	文化十四				1817			2		23.8	22.1	83.7	1	尖頭	スギ	無
16	奉再建神明宮華表一基	文政元				1818			3		25.6	24.4	88.1	2.8	尖頭	スギ	無
17	奉建立天照皇大神宮宝社一宇	文政三年			拾二号	1820	11				27.2	25.9	94.1	2.5	尖頭	スギ	無
18	奉寄附神明宮御神鏡一面	天保八				1837		4			28.8	25.5	96.3	2.3	尖頭	マツ	無
19	奉造立天照皇太神宮宝社一宇	天保十二年			拾三号	1840	12				25.7	23.8	105.9	2.7	尖頭	スギ	無
20	奉再建神明宮鳥居一基	安政四				1857			4		26.7	24	98.8	2.3	尖頭	マツ	無
21	玉鏡〇奉修理皇太神宮宝殿	文久第二			拾四号	1862	13				27.6	24.9	101	2.5	尖頭	スギ	無
22	奉葺替郷社神明社拝殿一棟			明治十年		1877				1	21.3	19.9	70.9	2.4	尖頭	スギ	無
23	〇奉修覆県社神明社一宇鳥居一基		御遷宮式執行	明治十六	拾五号	1883	14				27.2	24.2	102	2.1	尖頭	スギ	無
24	奉葺替神明社本殿屋根一棟			明治三十年		1897				2	30.3	30	91	2.8	平頭	スギ	無
25	奉修覆県社神明社殿一宇		御遷宮式執行	明治三十六	拾六号	1903	15				26.9	23.8	101.9	3.7	尖頭	スギ	無
26	奉再建大鳥居一基			明治三十八年		1905			5		24.4	22.1	81.9	2.3	尖頭	マツ	無
27	奉建立県社神明社大鳥居一基			大正十二年		1923			6		26.7	23.7	100.7	3	尖頭	ヒバ	無
28	奉修繕県社神明社　社　殿　一　宇			大正十二年		1923				3	29.3	26.5	115.3	3.5	尖頭	ヒバ	無
29	土崎神明社　拝殿　幣殿屋根　玉橋　修理			昭和三十七年		1962				4	22.3	下 18 最下 10.3	82	1.3	尖頭	スギ	無
30	土崎神明社　拝殿　幣殿　修理		土崎神明社三百五十年祭記念	昭和三十八年		1963				5	22.1	22.1	95.3	1.5	尖頭	スギ	無
31	神明社本殿　幣殿　拝殿　修理			昭和六拾弐年		1987				6	26.5	20.8	120	2.9	尖頭	スギ	無

※番号は種別ごとの順番を示す

別表４-1　土崎神明社棟札記載人物職名一覧

	棟札・年号・種別						仏教関係官職			神道関係官職						願主・寄付人		普請関係者									町人代表者										監督者				職人																	
	和暦	西暦	遷宮	寄進	鳥居	修理	大導師別当	導師	別当	神主	祠官	祠掌	社司	社掌	宮司	願主	寄附人	駅馬方御用係	勘定役	勘定役見習	御普請御蔵元	御普請御蔵元締役	御普請係	御普請世話方	社頭御造営係	同副世話係	氏子総代	庄屋	庄屋加談	庄屋見習	庄屋見習勘定役兼務	世話役	丁代	戸長	各町世話係	惣代	受負人	施工者	工事監督	若者頭	大工	小工	木挽	萱手	屋根葺	塗師	壁塗	左官	塗装	鍛冶等	金具師	石工	裏銘執筆	鏡台細工師	鋳物師	彫刻	鍼力職	畳指	建具	諸職人手先	仕事師	雇頭
1	慶安3年	1650	1													○																								○	○							○											
2	寛文10年	1670	2						○							○																								○																			
3	元禄4年	1691	3						○							○																								○																			
4	正徳2年	1712	4					○	○							○																○								○								○											
5	享保5年	1720	5					○	○							○											○					○								○								○											
6	元文5年	1740	6					○	○							○											○					○								○		○																	
7	宝暦10年	1760	7					○	○							○											○					○								○		○																	
8	明和6年	1769	8					○	○							○											○				○	○								○		○								○										
9	安永9年	1780	9					○	○																		○					○								○		○						○											
10	天明3年	1783		1			○																				○					○																												
11	天明3年	1783			1				○																		○					○								○		○																	
12	寛政5年	1793		2				○	○							○											○					○								○																				
13	寛政8年	1796		3					○																		○					○								○															○				
14	寛政12年	1800	10					○	○																		○				○	○								○		○																	
15	文化14年	1817			2				○							○											○					○																												
16	文政元年	1818			3				○																		○					○								○		○																	
17	文政3年	1820	11					○	○										○					○			○					○								○		○	○						○		○							○		
18	天保8年	1837		4					○							○											○	○																									○	○	○					
19	天保12年	1841	12					○	○	○								○	○		○		○	○			○	○					○							○		○	○		○	○			○	○	○								○
20	安政4年	1857			4				○	○									○	○							○		○			○								○																			
21	文久2年	1862	13				○			○									○			○	○				○			○		○								○		○	○		○	○													○
22	明治10年	1877				1					○	○												○			○													○			○																○
23	明治16年	1883	14									○				○					○				○	○							○	○						○		○	○			○			○	○						○			○
24	明治30年	1897				2							○				○																									○																
25	明治36年	1903	15										○	○		○					○						○									○				○			○																○
26	明治38年	1905			5								○	○							○						○									○	○				○																		
27	大正12年	1923			6																										○					○			○	○																	○	
28	大正12年	1923				3							○	○													○									○			○		○				○			○											○
29	昭和37年	1962				4									○	○																						○		○															○				
30	昭和38年	1963				5									○												○											○		○								○									○			
31	昭和62年	1987				6									○												○											○		○																			

導師　法要の主宰。通常は一山の代表。
大導師　法要全体の統括者。
別当　僧の官名。寺務の統括者。

神主　神職。また、その長。
祠官　神主に同じ。
祠掌　社掌の旧称。
社司　神主。祭祀・庶務を管理。
社掌　神職の職名。社司の下。
宮司　神社の長である神官。

元締役　仕事全体を締めくくる役目の人。
氏子総代　神社の祭祀圏の住民たる氏子の代表者。
社頭　社殿の前。
蔵元　出納管理者か。
願主　神仏に願をかける当人。
庄屋　江戸時代の村落の長。主に関西での呼称。
丁代
戸長　明治前期の町村の行政事務を司った役人。従来の庄屋などから選ばれた。
惣代

鍼力職　ブリキ職人か。
鍛冶　金属を熱して打ち鍛え、道具を作る人。
金具師　金属製の細工物の職人か。
木挽　木材をのこぎりで挽ききって用材に仕立てる職人。
萱手　萱屋根を葺く職人。
屋根葺　屋根を葺く職人。
石工　石を細工する職人。
鋳物師　鋳物を作る職人。
塗師　漆器を作る職人。（？）
壁塗　壁を塗る職人。左官。
左官　土壁・漆喰壁を塗る職人。
塗装

雇頭
畳指
仕事師　土木工事・土建工事に従事する人。とび職。
建具　戸・障子・ふすまなど開閉できる仕切り。

別表４－２　土崎神明社棟札に記載された丁代・町名一覧

	和暦	西暦	町数	町名																						不明												
				穀保町	新城町	上酒田町	酒田町 下酒田町	永覚町	加賀町	小鴨町	萱村町	かつき町 萩町	新町	肴町	新柳町	愛宕町	清水町	旭町	本山町	壱騎町	稲荷町	御蔵町	古川町	幕洗川	将軍野幕洗川	ア				カ		サ		タ	ナ	ハ	マ	ヤ
4	正徳2年	1712	10	五左衛門	佐藤左衛門	茂右衛門	六郎左衛門	徳左衛門	善吉	八郎兵衛	惣九郎	四郎兵衛	惣左衛門																									
5	享保5年	1720	10									越前屋四郎兵衛	金子惣左衛門	小林甚太郎								佐々木利左衛門								川口仁兵衛	小納屋小兵衛			辻　市兵衛		古木五兵衛		
																														小鴨弥兵衛	小納屋甚兵衛							
6	元文5年	1740	10									二木市良兵衛		小林甚太郎							能登屋久右衛門					遠藤孫兵衛	岡田七兵衛			川口六郎兵衛	木田縫殿右衛門			徳山吉右衛門		古木儀兵衛		
																														菊地庄左衛門								
7	宝暦10年	1760	10					船木八右衛門									伊藤権兵衛									相澤治右衛門	大野庄左衛門	小谷部嘉右衛門		員田新右衛門	小嶋三良右衛門	桜田文左衛門	杉山與十郎			古木義兵衛		
8	明和6年	1769	10					岩屋作兵衛						山村与十郎						平沢善兵衛						石川長左衛門	伊勢屋孫左衛門			川口小助		佐地藤右衛門	須田安右衛門				水巻哀右衛門	
																																新保七左衛門						
9	安永9年	1780	10	中野三郎右衛門								木村彦右衛門		山村與十郎				三國屋四郎右衛門		平澤長兵衛						岩見屋清四郎	越後屋善四郎			帝谷市郎兵衛						藤田長三郎	三國屋善助	
10	天明3年	1783	10	中野三郎右衛門										山村与十郎												岩間長九良				加々屋惣八	紙屋市郎兵衛					藤田市右衛門	松本与右衛門	
																														片村庄九良	川口勘兵衛						三国屋善助	
11	天明3年	1783	10	中野三良右衛門										山村與十良												飯塚久兵衛				賀加屋小兵衛	紙屋市良兵衛					藤田市右衛門	松本與右衛門	
																														賀加屋宗八	川口勘兵衛						三國屋善助	
12	寛政5年	1793	10	中野三郎右衛門				岩谷作兵衛				二木市郎兵衛		山村与十郎												伊勢屋太郎左衛門				加々屋利左衛門	川口勘兵衛			戸嶋十左衛門		藤田市右衛門	宮崎惣左衛門	
13	寛政8年	1796	10	中野三郎右衛門								二木市良兵衛					泉屋定四良									伊勢屋多良左衛門				加賀屋理左衛門	工藤忠右衛門	佐藤彦三良				藤田市右衛門	宮崎惣左衛門	
																																				船越屋久五良		
14	寛政12年	1800	5																											加賀屋清九郎	小納屋久右衛門	杉山仁兵衛			長濱屋善左衛門			
																																			浪岡利右衛門			
15	文化14年	1817	10					岩谷作兵衛				越前屋太右門										佐々木庄助				小野屋儀兵衛				小玉源右門		齊藤忠四良	菅與左門				間杉專右門	
																																新保長右門					宮崎惣右門	
16	文政元年	1818	10					岩屋作兵衛				越前屋多右衛門										佐々木庄助				小野屋儀兵衛				小玉源右衛門		齊藤忠四良	菅與右衛門				間杉專右衛門	
																																新保長右衛門					宮崎惣右衛門	
17	文政3年	1820	10					岩谷作兵衛				越前屋太兵衛										佐々木宇兵衛				小野屋儀兵衛				小玉源右衛門		齊藤忠四郎	菅與左衛門				間楫專右衛門	
																																新保長右衛門					宮崎惣左衛門	
19	天保12年	1841	11	中野三郎右衛門	樫屋太郎兵衛	吉田喜兵衛	須磨屋清九郎	岩谷作兵衛	下田又兵衛	三浦捨松		竹内與右衛門	寺岡治右衛門	小林甚太郎	虎屋文蔵																								
20	安政4年	1857	11				山王丸屋小左衛門	岩屋嘉三郎		間瀬屋新助		木村屋康之助														小形屋七十郎	小田嶌屋佐兵衛					塩野屋清兵衛		滝澤屋五郎兵衛		長谷川屋久蔵		安田屋儀右エ門
																																						萬屋周助
21	文久2年	1862	10				山王丸小左衛門			間瀬新助		木村庫之助														小形屋七蔵	小田島喜右衛門			幸野新蔵				澁澤五郎兵衛		長谷川久蔵		萬屋福蔵
																																				木庄平八		
23	明治16年	1883	17	石野勘助	加賀谷保吉	中野喜兵エ	真鍋長壽	近藤源八	青崎吉助	間瀬新助		二木市良右エ門	小形文右エ門	山村與十之助	佐藤幸吉	石田文蔵	金子清四郎	長村與五郎	小室倉太	平澤五良助	藤山佐兵					石田為治	井上甚治	越後谷周吉	小笠原栄吉						長濱三太良		松山末吉	安田常吉
				小野吉右エ門			山王丸小左衛門		青嵜吉助			竹内長九郎								中田永吉						石田茂吉	岩見五兵衛	越後谷萬蔵							中山祐助			
												山田政吉														泉田鶴治	越後谷久治	遠藤繁松										
25	明治36年	1903	19	須磨與十郎	野口平治	佐藤吉治	山王丸小左エ門	岩谷豊治	加賀谷東十郎	門間傳吉		木村末吉	小林時松	小林吉十郎	加藤末吉	長野谷長四郎	伊藤常吉	小野新吉	石田芳之助	中田永吉	能登谷仁三郎	佐々木良吉	舘山冨太郎															
																	金澤源吉																					
26	明治38年	1905	19	石野谷勘助	小野又吉	佐藤吉治	山王丸小左エ門	岩谷豊治	加賀谷東十郎	門間傳吉		木村末吉	高井鶴五郎	小林吉十郎	山本菊太郎	長野谷長四郎	伊藤常吉	三國谷四郎右エ門	柴田忠吉	中田永吉	能登谷仁三郎	佐々木良吉	舘山冨太郎															
				刈田義門													泉谷久造																					
																	三森清治																					
27	大正12年	1923	1																			館山松太郎																
																						前田治平																
28	大正12年	1923	25	小野吉右エ門	橋本周吉	細川政治	藤井敬治	船木松五郎	藤本政治	石野熊吉		山田要助	小林時悉	加賀谷喜代松	佐藤寅五郎	門間金右エ門	第一区 船木定五郎	第一区 山内永治	柴田忠吉	保坂久治	能登谷仁三郎	館山松太郎	舘山冨太郎	武田榮隆	池田喜助														
				浅野千代吉													第二区 寺庭隆賢	第二区 松田喜太郎																				
																	第三区 武田忠助	第三区 石田遠正																				

凡例	丁代	戸長	各町世話係	惣代

※　黒字は棟札に町名が記されているもの。

※　赤字は棟札に町名が記されていないもの。

※　町名欄中の赤字の人物は、同姓などの理由から町名を推定したもの。

別表5　土崎神明社棟札国・町（当所）等記載一覧

	和暦	西暦	遷宮	寄進	鳥居	修理	主文	国	町
1	慶安3年	1650	1				惣戒師釈迦牟尼如来　　奉造立伊勢天照太神宮壹宇		
2	寛文10年	1670	2				惣戒師釈迦牟尼如来　　奉造立伊勢天照大神宮壹宇		
3	元禄4年	1691	3				惣戒師釈迦牟尼如来　　奉葺替伊勢天照大神宮壹宇		
4	正徳2年	1712	4				奉修造伊勢大神宮御堂一宇　　奉為大檀那源朝臣義格公国家安全御武運長久	1	
5	享保5年	1720	5				奉葺替伊勢太神宮一宇奉為国主源朝臣義峯公御武運長久国家安全	2	
6	元文5年	1740	6				奉造替内外太神宮社一宇大守御武運長久国家安全処	3	
7	宝暦10年	1760	7				奉葺替内外太神宮社一宇御国主御武運長久国家安全当所繁昌所	4	1
8	明和6年	1769	8				奉改造伊勢太神宮内殿一宇　奉為国主源朝臣義敦公御武運長久国家安全	5	
9	安永9年	1780	9				奉葺替内外太神宮社一宇大守源義敦公御武運長久国家安全当所繁昌所	6	2
10	天明3年	1783		1			奉寄進天照豊受両大神宮御宝前幕壱張　当所繁栄請災消滅　町内安全福招増長　祈所		3
11	天明3年	1783			1		奉建立天照豊受両皇太神宮鳥居一宇御国主武運長久国家安全町内無難氏子繁栄処	7	4
12	寛政5年	1793		2			奉寄進天照豊受両皇大神宮御宝前敷石子孫繁昌当所繁栄所		5
13	寛政8年	1796		3			奉修神明宮御懸額開眼法供　大旦越　源義和公　御武運長久五穀成就入舩増長当所繁昌　祈　処		5
14	寛政12年	1800	10				奉造立天照皇太神宮宝社一宇大旦那御武運長久国家安全五穀豊饒氏子除災堅固入舩無難諸民快楽所	8	
15	文化14年	1817			2		奉建立神明宮石華表天下泰平国家安全願主家内安穏当処繁晶百事吉祥所	9	7
16	文政元年	1818			3		奉再建神明宮華表一基当国大守君御武運長久当所繁昌惣願主家内安全祈祷処	10	8
17	文政3年	1820	11				奉建立天照皇大神宮宝社一宇大旦那御武運長久国家安全五穀豊饒氏子除災堅固入舩無難諸民快楽所	11	
18	天保8年	1837		4			奉寄附神明宮御神鏡一面惣願主家運長久如意吉祥攸		
19	天保12年	1841	12				奉造立天照皇太神宮宝社一宇太守義厚公御武運長久国家安全五穀豊饒氏子除災堅固入舩無難諸民快楽攸	12	
20	安政4年	1857			4		奉再建神明宮鳥居一基当国大守君公御武運長久当所繁昌惣願主家内安全長日祈処	13	9
21	文久2年	1862	13				奉修理皇太神宮宝殿伏願大檀那御武運長久　所		
22	明治10年	1877				1	奉葺替郷社神明社拝殿一棟氏子惣町繁昌祈処		10
23	明治16年	1883	14				奉修覆県社神明社一宇鳥居一基棟符　土嵜港氏子　安全守賜布処		
24	明治30年	1897				2	奉葺替 神明社本殿屋根一棟		
25	明治36年	1903	15				奉修覆県社神明社殿一宇　氏子安全乃攸		
26	明治38年	1905			5		奉再建大鳥居一基氏子安全祈攸		
27	大正12年	1923			6		奉建立県社神明社大鳥居一基		
28	大正12年	1923				3	奉修繕県社神明社　社殿一宇		
29	昭和37年	1962				4	奉鎮祭　　土崎神明社　拝殿　幣殿　玉橋　屋根修理		
30	昭和38年	1963				5	奉鎮祭　　土崎神明社　拝殿　幣殿　修理		
31	昭和62年	1987				6	奉鎮祭　　神明社本殿　幣殿　拝殿　修理		
計			15	4	6	6		13	10

「国」に関する記載について

- 31点のうち、13点に国に関する記載がある。
- もっとも古いものは正徳2年(1712)の遷宮に際してのもの。
- もっとも新しいものは安政4年(1857)の鳥居の再建に際してのもの。明治以降のものにはない。
- 13点中11点が「国家安全」を祈る文言である。
- 13点中4点で藩主の武運を祈る文言に「国主」という表現を使っており、他に「当国大主君」という表記のものも2枚ある。

「町」に関する記載について

- 31点のうち、10点に町に関する記載がある。
- 6点は、「国」と「町」の両方に関する記載がある。
- 「町内」という記載があるのは、天明3年(1783)の2点のみ。
- 宝暦10年(1760)から安政4年(1857)までの8点に「当所（処）繁昌（晶）／繁栄」という記載がある。
- 明治10年(1877)の拝殿葺き替えに際してのものにのみ、「氏子惣町」という表現がある。

別表６　土崎神明社棟札記載梵字一覧

	和暦	西暦	位置	種子	慣用音	仏尊	備考
10	天明3年	1783	裏	वं	バン	金剛界大日如来	
12	寛政5年	1793	裏	वं	バン	金剛界大日如来	
13	寛政8年	1796	表	अ	ア	胎蔵界大日如来	
			裏	वं	バン	金剛界大日如来	
				ह्रीः	ヂリ	持国天	
				मा	マ	孔雀明王/摩利支天/大自在天/大黒天	特定できず
14	寛政12年	1800	表	अ	ア	胎蔵界大日如来	
			裏	भ्रूँ	ボローン	一字金輪	大日如来が最高の境地に入って説いた真言の一字を人格化したもの
				श्री	シリー	吉祥天	
17	文政3年	1820	表	अ	ア	胎蔵界大日如来	
				भ्रूँ	ボローン	一字金輪	大日如来が最高の境地に入って説いた真言の一字を人格化したもの
				श्री	シリー	吉祥天	
18	天保8年	1837	表	अ	ア	胎蔵界大日如来	
19	天保12年	1841	表	आः	アーンク	胎蔵界大日如来	
			裏	भ्रूँ	ボローン	一字金輪	大日如来が最高の境地に入って説いた真言の一字を人格化したもの
				श्री	シリー	吉祥天	
21	文久2年	1862	裏	वं	バン	金剛界大日如来	
			裏	भ्रूँ	ボローン	一字金輪	大日如来が最高の境地に入って説いた真言の一字を人格化したもの

※ 種子：密教において、梵字一字で仏像を表示したもの。

※ 梵字のフォントがないため、デーヴァナーガリー（ヒンディー語などで用いられている文字）で代用した。

※ 字形に多少の相違がある（別添写真参照）。

参考：『梵字事典』（中村瑞隆・石村喜英・三友健容　編著　1993　雄山閣）

別表7 土崎大火記録 （秋田市役所土崎出張所 1941年より）

番号	元号	西暦	月日	内容
1	元禄元年	1688	5月6日	住家95戸、倉庫33棟、米19,980石焼失
2	元禄元年	1688	7月12日	住家200戸、倉庫6棟、裏長屋66戸焼失
3	元禄元年	1688	9月8日	住家50棟焼失
4	正徳五年	1715	12月	永覚町より出火、本家26戸、借家50戸、土蔵3棟、寺院2焼失
5	享保六年	1721	2月15日	夜四ッ時すぎ新城町より出火、小鴨町まで延焼、本家273戸、長屋527戸、寺院10、閑居庵5ヶ所焼失
6	享保七年	1722	8月6日	夜八ッ時、加賀町より澁谷庄兵衛長屋より出火、下酒田町より萩町まで延焼、本家227戸、長屋267戸焼失
7	享保十八年	1733	2月12日	夜四ッすぎ、新城町より小鴨町まで延焼、本家273戸、長屋527戸、寺10、塔中3、閑居庵5、土蔵32焼失
8	享保十九年	1734	8月6日	夜八ッ時、本家227戸、長屋267戸焼失。加賀町澁谷庄兵衛長屋より出火、下酒田町より萩町まで延焼
9	明和七年	1770	3月14日	夜、下酒田町より出火、上は御藏町、下は加賀町まで、本家211戸、長屋621戸焼失
10	天明三年	1783	6月28日	夜、永覚町板屋庄助長屋より出火、本家127戸、長屋379戸焼失。永覚町より小鴨町まで延焼。本家594人、長屋1,153人
11	享和二年	1802	6月4日	夜九ッ時、小鴨町草皆久兵衛より出火、下新町より永覚町まで、本家167戸、長屋234戸焼失
12	文化二年	1805	3月18日	晝、萩町平澤善七より出火、萱村町は1戸、下は相染村まで、本家131戸、長屋28戸焼失
13	文化三年	1806	1月21日	夜九ッ時、新城町清水永太郎隠長屋より出火、本家83戸、長屋197戸、社堂5、寺4、庵2、観音堂1焼失
14	文化十一年	1814	5月16日	夜、四ッ時、上酒田町小納屋久右衛門裏小屋より出火、本家249戸、長屋535戸、土藏54、穴藏7、室3焼失。女、焼死1人
15	文政七年	1824	2月24日	392戸焼失
16	文政七年	1824	3月28日	永覚町より上酒田町まで省筆
17	文政七年	1824	5月12日	新町より出火、本家8戸、土藏14、板藏1、米105,139俵焼失
18	天保十三年	1842	11月3日	新城町より出火し90戸焼失
19	慶應二年	1866	2月3日	海禪寺借地甲州谷クラ方より出火し、新柳町70戸、土藏6棟、寺1、堂1棟焼失
20	慶應二年	1866	10月4日	松本與右衛門方より出火、本家707戸、土藏34棟、寺6、社堂7焼失し、1人焼死
21	慶應三年	1867	3月24日	加賀町根布谷吉五郎方より出火、本家345戸、土藏17棟、寺10、社堂7、社務所3焼失
22	明治元年	1868	2月24日	相染村新地惣助方より出火、同村及び新町107戸、土藏8棟焼失
23	明治五年	1872	10月2日	新城町黒丸敬一郎、能登谷永助間より出火、住家150戸、土藏1棟焼失
24	明治六年	1873	7月6日	加賀町、中村キクより出火、60戸焼失
25	明治九年	1876	4月30日	見姓寺長屋安部スエ方より出火し334戸、土藏2棟、寺1焼失
26	明治十年	1877	11月28日	肴町越前谷平七方より出火、83戸焼失
27	明治十二年	1879	7月27日	本住寺借地金子定治方より出火し70余戸焼失
28	明治十九年	1886	9月3日	相染新田八百屋仁三郎と村上富藏間より出火、80余戸及び役場1棟焼失
29	明治二十年	1887	12月15日	下酒田町菅龜治方より出火、312戸、土藏7棟、寺2焼失
30	明治二十一年	1888	1月27日	相染新田加賀屋喜藏方より出火、60余戸及び学校1棟焼失
31	明治二十四年	1891	11月4日	下酒田町長岡谷源四郎長屋米屋市太郎より出火し83戸、土藏1棟等焼失
32	明治二十七年	1894	4月7日	午前零時半、下酒田町石川文藏池田ハル間より出火、清水町27戸、見姓寺下酒田町東側20戸郵便局棟焼失
33	明治二十七年	1894	11月6日	午前二時、古川町館山三郎兵衛小屋より出火し古川町1戸、永覚町40戸、下酒田町47戸、上酒田町13戸、旭町23戸、清水町105戸、外は土藏4棟、郵便局、四十八銀行主張所、登記所、浮圓寺、正光寺、見姓寺、蒼龍寺等焼失
34	明治二十八年	1895	4月3日	午前二時萩町川口トク方より出火、同町40戸、土藏3棟、森町15戸焼失
35	明治二十八年	1895	10月19日	午前一時、旭町大島リノ方より出火し同町70戸焼失
36	明治三十一年	1898	6月18日	新城町堺運吉、越中谷ツエ間より出火、新柳町11戸、新城町120戸、上酒田町57戸、下酒田町9戸、清水町1棟、外に土藏5棟、秋田銀行支店四十八銀行支店金光寺等焼失
37	明治三十一年	1898	11月25日	午前二時、新町早坂半治、中村源藏の何れかより出火し、同町15戸、相染新田25戸焼失
38	明治三十八年	1905	11月4日	午前十一時半清水町伽羅丹治の袋家日理宗靜方より出火、36戸焼失
39	明治四十年	1907	7月20日	神明社大祭当日、午後二時、萩町柴田萬助方より出火し同町及壹騎町75戸焼失
40	大正十一年	1922	1月2日	愛宕町床屋朝香長太郎宅より出火、愛宕町、新柳町の大部分御藏町の一部を焼失、全焼家屋123戸。損害見積、56万2,400円
41	大正十一年	1922	5月1日	壹騎町より出火、同町及び小鴨町萩町肴町新町の大部分を焼失、損害見積、58万9,500円
42	昭和二年	1927	4月3日	午前一時十分、八軒町小林末治方より出火、東南の烈風に煽られ同町及び古川町濱相染等延焼、全焼74戸、土藏、物置54焼失。損害見積、32万8,300円
43	昭和二年	1927	6月24日	午前三時半、愛宕町加賀谷留吉方より出火、同町大部分清水町の一部、新城町上酒田町の大部分に延焼、住家194棟、土藏及び物置45棟等焼失、損害約48万2,500余円
44	昭和二年	1927	12月7日	午前零時、肴町山下又治郎宅より出火、西北の大烈風に煽られ小鴨町に延焼し肴町小鴨町の大半、壹騎町旭町の一部を延焼、戸数49戸、非住家9戸焼失、損害約10万8,000余円

土崎災害記録(土崎湊町史　1941年)

番号	元号	西暦	月日	内容
1	享保十三年	1728	7月27日	洪水
2	文化七年	1810	8月27日	地震
3	文化十四年	1817	6月6日	洪水

別表８　秋田市内で調査・報告された棟札一覧

NO	建物名称	年号	西暦	棟札概要	掲載資料名
1	**土崎神明社**	**慶安３年**	**1650**	**・奉造立伊勢天照大神宮壹宇**	
2	**土崎神明社**	**寛文10年**	**1670**	**・奉造立伊勢天照大神宮壹宇**	
3	佐竹家霊屋	寛文12年	1672	・（前略）源義隆尊君欲造立先祖之霊堂（後略） ・大旦那　源義處尊公 ・執権　多賀谷左兵衛　梅津与左衛門　梅津半右衛門 ・大奉行　田崎善助　同　浅原惣右衛門 ・小奉行　金太郎右衛門　同　西野四兵衛尉 ・大工頭　吉原五右衛門 ・同小頭　茂又金右衛門　同　石川孫右衛門 ・大工棟梁　市左衛門　同　源之丞　同　六兵衛 同　長右衛門	重要文化財天徳寺山門・総門保存修理工事報告書　P122
4	**土崎神明社**	**元禄４年**	**1691**	**・奉葺替伊勢天照大神宮壹宇**	
5	正八幡宮	元禄５年	1692	・奉立正八幡宮 ・大檀越　源義處　・御大工頭　榊輿右衛門 ・御大工　斎藤善兵衛 ・造立大工棟梁　長谷川源之丞　會場治左衛門	秋田市史美術・工芸編　P94
6	**土崎神明社**	**正徳２年**	**1712**	**・奉修造伊勢大神宮御堂一宇**	
7	正八幡宮	正徳５年	1715	・奉修覆正八幡宮 ・大檀越　義峯	秋田市史美術・工芸編　P94
8	**土崎神明社**	**享保５年**	**1720**	**・奉葺替伊勢太神宮一宇**	
9	正八幡宮	元文３年	1738	・奉修覆正八幡宮 ・大檀越　義峯　・御大工頭　豊田八右衛門 ・御大工　斎藤清右衛門　・修復大工棟梁　七郎兵衛	秋田市史美術・工芸編　P95
10	**土崎神明社**	**元文５年**	**1740**	**・奉造替内外太神宮社一宇**	
11	正八幡宮	寛延４年	1751	・奉修覆正八幡宮 ・大檀越　義真　・御大工　高宮又五郎 ・棟梁　藤右衛門　多郎右衛門	秋田市史美術・工芸編　P95
12	金刀比羅神社	宝暦９年	1759	・奉勧請金毘羅大権現　・別当龍明院知鏡 ・本願主　間杉五郎八辰明　本間太兵衛朝貞 工藤忠右衛門助春　松本与右衛門武眞 高林与市郎　神馬六三郎章方 石川忠左衛門紀貞	秋田市史美術・工芸編　P99
13	**土崎神明社**	**宝暦10年**	**1760**	**・奉葺替内外太神宮社一宇**	
14	金刀比羅神社	宝暦12年	1762	・遷社	秋田市史美術・工芸編　P99
15	**土崎神明社**	**明和６年**	**1769**	**・奉改造伊勢太神宮内殿一宇**	
16	正八幡宮	安永４年	1775	・奉造立正八幡宮 ・御大工頭　大黒三郎兵衛　大黒又之丞　飛沢与治右衛門 ・大工棟梁　佐藤弥右衛門　佐々木喜左衛門	秋田市史美術・工芸編　P95
17	金刀比羅神社	安永８年	1779	・金刀比羅大権現　國家安産 ・安永８年　再新築 ・當社造営替　中野彌助 ・助力願主　大阪　平野屋傳吉 ・大阪大手筋　泉谷清兵衛　半次郎	土崎港町史P275
18	**土崎神明社**	**安永９年**	**1780**	**・奉葺替内外太神宮社一宇**	
19	福城寺	天明２年	1782	・本堂 ・棟梁大工　藤原多良兵衛　平野内傳三郎 ・大工　平野内傳七　高橋利助　高橋三之助　藤原孫太郎 ・木挽　猿田三太郎　山本助太郎	秋田市史美術・工芸編　P73
20	**土崎神明社**	**天明３年**	**1783**	**・奉寄進天照豊受両大神宮御宝前幕壱張**	
21	**土崎神明社**	**天明３年**	**1783**	**・奉建立天照豊受両皇太神宮鳥居一宇**	
22	金刀比羅神社	天明６年	1786	・建立内陣	秋田市史美術・工芸編　P99
23	**土崎神明社**	**寛政５年**	**1793**	**・奉寄進天照豊受両皇大神宮御宝前敷石**	
24	金刀比羅神社	寛政７年	1795	・建立	秋田市史美術・工芸編　P99
25	**土崎神明社**	**寛政８年**	**1796**	**・奉修神明宮御懸額開眼法供**	
26	**土崎神明社**	**寛政12年**	**1800**	**・奉造立天照皇太神宮宝社一宇**	
27	金刀比羅神社	享和２年	1802	・造立石鳥居	秋田市史美術・工芸編　P99
28	天徳寺書院	文化３年	1806	・萬固山天徳寺書院一宇御造立 ・御家老　岡本又太郎　小野岡大和　大越十郎兵衛 足田斎　小野崎正九郎 ・御財用奉行　今易右衛門 ・大木屋御守　岡見徳平 ・御財用吟味役　小野崎五兵衛 ・大木屋御普請役　町田平治 ・御大工頭　大黒三郎兵衛 ・同加勢　茂又傳市郎 ・御大工　斎藤小市 ・大工棟梁　儀右エ門　○太郎　市右衛門 ・木挽棟梁　市右衛門	重要文化財天徳寺山門・総門保存修理工事報告書　P124
29	佐竹家御霊屋屋根葺替	文化５年	1808	・御屋根銅瓦葺文化五年戊辰秋　御普請出来 ・御財用奉行　岡見徳平　同吟味役　土屋忠右衛門 ・大木屋樵　石井清士 ・錺屋御請負　長太郎　文四郎　久次郎両次　五郎八 彦太郎　村蔵○兵衛 ・御大工頭　菅野東三郎 ・御大工　茂又傳一郎 ・御大工加勢　斎藤文四郎 ・大工棟梁　金兵衛　惣右衛門 ・平大工　○助　長助　○助　忠助 ・木挽棟梁　○四郎 ・大木屋定出人足　定八　○兵衛　徳蔵	重要文化財天徳寺山門・総門保存修理工事報告書　P122
30	正八幡宮	文化10年	1813	・奉修覆正八幡宮 ・大檀越　義和	秋田市史美術・工芸編　P95
31	**土崎神明社**	**文化14年**	**1817**	**・奉建立神明宮石華表**	
32	**土崎神明社**	**文政元年**	**1818**	**・奉再建神明宮華表一基**	

33	八幡秋田神社 （大八幡神社）	文政２年	1819	・奉修覆	秋田市史美術・工芸編　P97
34	**土崎神明社**	**文政３年**	**1820**	**・奉建立天照皇大神宮宝社一宇**	
35	金刀比羅神社	文政４年	1821	・建立石灯篭	秋田市史美術・工芸編　P99
36	佐竹家霊屋屋根葺替	文政４年	1821	・御屋根銅瓦葺之所小杤小羽ニテ葺努文政四辛巳年冬御普　請出来 ・御勘定方吟味役　町田平治 ・御普請役　秋山作右衛門 ・御大工　斎藤文四郎 ・御塗師　布川銀蔵 ・大木屋定出　又五郎 ・大工棟梁　庄之助 ・同平　新作弁蔵　新右衛門　五助　福之助　三之助 新蔵 ・小杤師　金蔵　松蔵　清蔵　善治　善助　善蔵　長之助・錺師　善兵衛　左五郎 ・日小屋番　惣八	重要文化財天徳寺山門・総門保存修理工事報告書　P123
37	八幡秋田神社 （大八幡神社）	天保２年	1831	・宝殿再営 ・義厚 ・大工　飛沢与治右衛門　藤川与兵衛	秋田市史美術・工芸編　P97
38	佐竹家御霊屋修理棟札	天保２年	1831	・奉修理御霊堂佐竹侍従源義厚賢君 ・御家老　石塚源一良　疋田齋　小瀬又七良　小鷹狩右近 ・御勘定奉行　介川東馬 ・御副役　小田内助右エ門　清水新六良 ・御勘定吟味役　町田平治　高橋武右エ門 ・大木屋御普請役　田中銀治 ・御大工頭　藤川輿兵衛 ・御繪師　渡部洞昌 ・御大工　鈴木平助 ・御塗師　茂木萬太　水戸部卯兵衛　布川勘左エ門 布川貞治 ・御張附師　山本五兵衛　日野杢之丞 ・大工棟梁　新太郎　太良右エ門 ・木挽棟梁　門之助 ・銅器方棟梁　喜八　喜四良 ・定出　専太良 ・日雇頭　杢蔵	重要文化財天徳寺山門・総門保存修理工事報告書　P124
39	八幡秋田神社 （大八幡神社）	天保３年	1832	・奉再建 ・大壇主　義厚 ・御大工頭　飛沢与治右衛門　藤川与兵衛 ・御大工　田名部宇吉 ・御塗師　水戸部宇兵衛　布川勘左衛門 ・大工棟梁　多郎右衛門　長四郎　三之丞 ・木挽棟梁　門之助 ・石切棟梁　仁三郎　三十郎　己之松	秋田市史美術・工芸編　P97
40	金刀比羅神社	天保７年	1836	・再建内陣　再興宮殿	秋田市史美術・工芸編　P99
41	三浦家住宅主屋	天保７年	1836	・日本大小神祗八百万神等	三浦館修復の記録　三浦家住宅主屋ほか７棟保存修理工事報告書 P216
42	**土崎神明社**	**天保８年**	**1837**	**・奉寄附神明宮御神鏡一面**	
43	**土崎神明社**	**天保11年**	**1840**	**・奉造立天照皇太神宮宝社一宇**	
44	金刀比羅神社	弘化３年	1846	・上棟　再建　修柴燈 ・棟梁　館山三郎兵衛 ・脇棟梁　加賀谷五郎兵衛	秋田市史美術・工芸編　P99
45	**土崎神明社**	安政４年	1857	**・奉再建神明宮鳥居一基**	
46	花立神明社	安政４年	1857	・天照皇大神宮　豊受大神宮　祭主　奉再建一宇○○ 御武運長久　村中　安全守護○ ・肝煎　田森長右衛門 ・長百姓　加賀屋喜蔵　多次衛門　幸右衛門　彦兵衛 六郎兵衛 ・祭主　千太良　伊藤正太　藤倉金明	土崎港町史P273
47	金刀比羅神社	安政５年	1858	・瓦葺替	秋田市史美術・工芸編　P99
48	金刀比羅神社	安政６年	1859	・建立鳥居　勧請一宇一社	秋田市史美術・工芸編　P99
49	金刀比羅神社	万延元年	1860	・造立石鳥居	秋田市史美術・工芸編　P99
50	花立神明社	文久元年	1861	・花立大神宮 ・加賀谷喜蔵　三郎左衛門　六郎兵衛　正吉　吉五郎 吉郎兵衛　五郎助　伊兵衛　又四郎　勘五郎助　伊兵衛　又四郎　勘四郎　小右衛門　長十郎 ・石切結邑　間兵衛　敬白	土崎港町史P273
51	三浦家住宅主屋	文久元年	1861	・棟札　天神地祗八百万神守護給攸　三浦盛訓 ・棟梁　槻木村　宮田市三郎吉則 ・大工　下虻川村　喜代松　同　弟吉　同　竹松 新関邑　喜七　竜ケ邑　宇之松　笠岡邑　三之丞　飯嶋村　米蔵　船橋村　清吉　槻木邑　倉吉 五十丁邑　伝治　同　和助 ・木挽　五拾目邑　金蔵　浦山邑　甚左衛門	三浦館修復の記録　三浦家住宅主屋ほか７棟保存修理工事報告書 P214
52	三浦家住宅	文久元年	1861	・奉　棟札　家運長久祈攸　三浦盛訓 ・茅葺師棟梁　秋田郡槻木邑　佐々木権十郎 ・棟清　秋田郡岡井戸邑　三治郎　同郡同村　嘉五郎 同郡八丁目村　藤兵衛　同郡槻木村　幸之助 同郡同村　嘉市　同郡下虻川村　三五郎 同郡笠岡村　正十郎　同郡下虻川村　仁左衛門　同郡同邑　重太郎　同郡同村　甚太 山本郡鯉川村　常吉　同郡八丁目村　長之助 同郡馬場目邑　長之助　同郡小池村　藤治郎 同郡大川村　忠之助　同郡八田村　孫七 同郡目長崎邑　甚之助　川辺郡松崎邑　多郎兵衛 同郡同邑　清治　同郡北川尻村　権四郎 同郡浜井川村　五郎作　同郡同村　和助	三浦館修復の記録　三浦家住宅主屋ほか７棟保存修理工事報告書 P214

				同郡岩瀬村　幾松　秋田郡五十目村　勝蔵 同郡同村　勘四郎　同郡夜叉袋村　乙吉 同郡館腰邑　寅吉	
53	**土崎神明社**	**文久２年**	**1862**	**・玉鏡〇奉修理皇太神宮宝殿**	
54	八幡秋田神社 （大八幡神社）	明治５年	1872	・八幡大神　奉合殿遷座	秋田市史美術・工芸編　P97
55	**土崎神明社**	**明治10年**	**1877**	**・奉葺替郷社神明社拝殿一棟**	
56	**土崎神明社**	**明治16年**	**1883**	**・〇奉修復県社神明社一宇鳥居一基**	
57	新政酒造明醸蔵	明治20年	1887	・奉上棟　屋舩大神　建築主　佐藤佐吉 ・棟梁　近間政吉　　・左官　渋谷豊吉 ・石工　倉田嘉市郎　・鍛冶　齋藤寅吉 ・人足　泉岡弟助	新政酒造建物調査報告書
58	金刀比羅神社	明治22年	1889	・再建鳥居	秋田市史美術・工芸編　P99
59	三浦家住宅米蔵	明治24年	1891	・上棟簡　屋船神　新蔵守護攸 ・大工棟梁　三浦平太　伊藤寅吉 ・蔵造本主　三浦貞治	三浦館修復の記録　三浦家住宅主屋ほか７棟保存修理工事報告書 P217
60	天徳寺山門	明治25年	1892	・奉請　大思教主釈迦牟尼佛等降臨道場雪禱十万施主災障　消除 ・大旦那　佐竹義生 ・家挾　　森田冬蔵 ・有志者長　渡部廣晋 ・世話人　三浦嘉兵衛 ・大工棟梁　尾張清吉 ・左官　　寺田清吉 ・石工　　石井仁右エ門 ・雇頭　　三浦定吉 ・万固山天徳禅寺五拾世秀芳代　侍者　亮芳謹記 ・木〇師　　佐藤政吉	重要文化財天徳寺山門・総門修理工事報告書P122
61	旧奈良家住宅南米蔵	明治26年	1893	・大工　阿部久蔵　・木挽　泉谷金治　・石工　越後孫吉	秋田市史美術・工芸編　P141
62	龍神社	明治28年	1895	・古願主ヨリ奉遷　諸産業隆五穀豊穣　掛巻母恐伎 ・斎主　神明社々司兼　社掌　土崎眞澄 ・古願主　蒼龍寺　住職 ・信徒總代　二人　石田道正　眞鍋長守	土崎港町史　P269
63	**土崎神明社**	**明治30年**	**1897**	**・奉葺替神明社本殿屋根一棟**	
64	金刀比羅神社	明治30年	1897	・大修繕	秋田市史美術・工芸編　P99
65	那波伊四郎商店商品倉庫	明治30年	1897	・八意　思兼大神　奉一宇四海建立文運長久 ・建主　初代那波伊四郎祐啓 ・大工棟梁　八代久之丞　藤田新助 ・鍛冶石工左官　渋谷豊吉 ・雇頭　高嶋寅之助 ・人工　八代鋳之助	那波伊四郎商店建物調査報告書
66	八幡秋田神社 （大八幡神社）	明治32年	1899	・県社秋田大神　遷座	秋田市史美術・工芸編　P98
67	旧金子家住宅	明治33年	1900	・奉納 ・大工棟梁　塚田 ・天上張替　昭和34年	旧金子家住宅復元整備工事報告書P60
68	三浦家住宅文庫蔵	明治35年	1902	・上棟簡　八意思兼神　屋船神　新舎守護攸 ・庫造本主　三浦兼造 ・大工棟梁　三浦平太　伊藤寅吉 ・左官　川辺兼蔵 ・木挽　泉金治　弟師　鈴木利喜蔵 ・大工　佐藤三之助　古井兵治　佐藤留吉　藤原喜代治　伊藤源吉　加賀谷佐助　加成千代治　斎藤富治郎	三浦館修復の記録　三浦家住宅主屋ほか７棟保存修理工事報告書 P217
69	**土崎神明社**	**明治36年**	**1903**	**・奉修復県社神明社殿一宇**	
70	**土崎神明社**	**明治38年**	**1905**	**・奉再建大鳥居一基**	
71	大彦商店醤油蔵	明治38年	1905	・大工　川村政蔵　・左官　工藤長蔵	大彦商店建造物調査報告書
72	八幡秋田神社 （大八幡神社）	明治40年	1907	・秋田神社八幡神社合祀	秋田市史美術・工芸編　P98
73	國萬歳酒造旧文庫蔵	明治41年	1908	・奉納　天下泰平　家運長久 ・大工棟梁　大嶋忠吉　　・左官棟梁　工藤長蔵 ・川口新助建立 ・大工副棟梁　大嶋岩治　・人足頭　川部銀蔵 ・大工　大嶋友治　松田喜助　大嶋長太郎　大塚長蔵 辻永末蔵　鈴木勇太郎　松田末蔵　杉山清蔵	平成17年登録文化財意見書
74	國萬歳酒造南仕込蔵	明治41年	1908	・奉納　天下泰平　家運長久 ・大工棟梁　大嶋忠吉　　・左官棟梁　工藤長蔵 ・川口新助建立 ・大工副棟梁　大嶋岩治　・雇頭　谷藤吉之助 ・大工　長谷川儀市　辻永長松　大嶋友治　大嶋長太郎　鈴木勇太郎　杉山清蔵	平成17年登録文化財意見書
75	那波伊四郎商店旧文庫蔵	明治41年	1908	・明治四拾壱年改築　　祐恭 ・當時棟梁　正　八代久之丞　　副　藤田長之助	那波伊四郎商店建物調査報告書
76	旧奈良家住宅北米蔵	明治41年	1908	・棟上 ・大工　阿部平蔵　・木挽　佐藤重蔵　・石工　越後孫吉	秋田市史美術・工芸編　P144
77	旧秋田銀行本店本館	明治43年	1910	・奉上棟株式會社秋田銀行新築百福輻湊之符 ・頭取　勲六等　辻兵吉　・副頭取　加賀谷長兵衛 ・取締役　勲七等　池田文太郎 ・工事委員長　村山三之助　　・同　佐藤文右衛門 ・同　野口銀平　　・同　河田輿惣左衛門 ・監査役　村山金十郎　・同　土田萬助 ・同　湊彌七 ・顧問　秋田縣技師　従六位　山口直昭 ・支配人工事委員　村田豊一郎 ・土崎支店長工事委員　仁平金吾 ・建築係　櫻田新一　・同　大野喜助　・同　清水喜信 ・銀行員建築事務係　高瀬武 ・大工棟梁　木谷米蔵　　・石工棟梁　石井定治 ・煉瓦工棟梁　奈良善次郎　・同　渡部重吉 ・人夫頭　高橋喜代治	秋田県の近代化遺産－日本近代化遺産総合調査報告書－

78	旧秋田銀行本店本館	明治45年	1912	・屋船久々能遲大神　屋船豊受比賣大神　神位 ・縣社日吉八幡神社社司　田村千里 ・取締役　勲七等　池田文太郎 ・工事委員長　村山三之助　　・同　佐藤文右衛門 ・同　河田輿惣左衛門 ・監査役　土田萬助　　・同　湊彌七 ・同　正八位勲六等　大島榮太郎 ・技師　工學士　星野男三郎 ・支配人工事委員　村田豊一郎 ・土崎支店長工事委員　仁平金吾 ・建築係　大野喜助 ・銀行員建築事務係　高瀬武 ・大工棟梁　木谷米蔵　　・石工棟梁　石井定治 ・煉瓦工棟梁　奈良善吉　・同　渡部重吉 ・左官棟梁　幸野鶴五郎　　・銅工棟梁　宇佐美元吉 ・人夫頭　高橋喜代治	秋田県の近代化遺産－日本近代化遺産総合調査報告書
79	森九商店仕込蔵	大正２年	1913	・大工棟梁　辻永長松　・左官　小野萬蔵 ・大工　長谷川儀市　大嶋忠治　塚田松蔵 ・人夫　大門佐太郎	森九商店建造物調査報告書
80	森九商店主屋	大正３年	1914	・奉棟上屋船豊受姫大神　罔象大神　青龍大神 ・本家　森川祐太　27歳 ・家主森川九十郎 ・大工棟梁　辻永長松　・大工副棟梁　長谷川儀市	森九商店建造物調査報告書
81	國萬歳酒造主屋	大正４年	1915	・奉棟上　天照皇大神 ・大工棟梁　大嶋忠吉 ・大工　齊藤善之助　大塚七之助　大嶋福拓　大嶋長太郎　　石黒作蔵　皆川彦吉 ・木挽　間杁長松　庄司定吉 ・左官　工藤長蔵	平成17年登録文化財意見書
82	金刀比羅神社	大正５年	1916	・修理大屋根・柱取替　入り口石壇階段	秋田市史美術・工芸編　P99
83	森川酒造店仕込蔵	大正11年	1922	・奉上棟屋舩大神家運永昌守護所 ・森川祐太35歳 ・棟梁　辻永長松　　・副棟梁　相原惣太郎 ・左官　三浦富三郎　・人夫頭　大島金之助	森川酒造建造物調査報告書
84	**土崎神明社**	**大正12年**	**1923**	**・奉建立県社神明社大鳥居一基**	
85	**土崎神明社**	**大正12年**	**1923**	**・奉修繕県社神明社　社殿一宇**	
86	八幡秋田神社 （大八幡神社）	大正13年	1924	・葺替惣社八幡秋田神社拝殿一宇	秋田市史美術・工芸編　P98
87	旧奈良家住宅文庫蔵	大正13年	1924	・棟上 ・大工　阿部貞治　上亀丁	秋田市史美術・工芸編　P145
88	那波伊四郎商店５号倉庫	昭和13年	1938	・上棟屋舩命八意思兼命　那波商店倉庫鎮護 ・建主　秋田市茶町梅ノ丁　那波繁治郎 ・懸社總社神社社司從七伎山本富治 ・大工棟梁　小林金次郎　　・鳶　尾口米蔵 ・山崎國治　石郷岡丙次	那波伊四郎商店建物調査報告書
89	**土崎神明社**	**昭和37年**	**1962**	**・土崎神明社　拝殿　幣殿屋根　玉橋　修理**	
90	**土崎神明社**	**昭和38年**	**1963**	**・土崎神明社　拝殿　幣殿　修理**	
91	金刀比羅神社	昭和39年	1964	・修築	秋田市史美術・工芸編　P99
92	金刀比羅神社	昭和61年	1986	・屋根銅板葺替	秋田市史美術・工芸編　P99
93	**土崎神明社**	**昭和62年**	**1987**	**・神明社本殿　幣殿　拝殿　修理**	
94	実城院			・大工棟梁　齋藤五郎八 ・墨世話　　齋藤五兵衛　川口源蔵 ・石工棟梁　西根勇蔵　間榮吉 ・弟子　　久松 ・石出シ　　男鹿浦田村　傳七 ・御大工　　飛澤輿治衛門	土崎港町史P288